The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞アンドレ・マルチネ著『ステップから大洋へ：印欧語と「印欧人」』（その1 ： 第I章～第III章）
Author(s)	Martinet, André; 神山, 孝夫
Citation	大阪外国語大学論集. 1997, 17, p. 63-95
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79731
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アンドレ・マルチネ著
『ステップから大洋へ－印欧語と「印欧人」－』
（その１：第Ⅰ～第Ⅲ章）

神　山　孝　夫　訳

André Martinet:
Des steppes aux océans
－L'indo-européen et les《Indo-Européens》－.
(Paris: Payot, 1987, 1994[2].)
traduit par Takao KAMIYAMA
(Première partie: chapitres I-III)

以下に訳出するのは，考古学や歴史学の成果との有機的な連関を図りつつ，印欧語比較文法の最新の成果が無理のない形で説かれた好著である。二重分節やエコノミーであまりにも名高い原著者について，訳者ごときが不十分な紹介をする必要もなかろう。言語学の前提知識のあまりない一般大衆が読者に想定されているため，印欧語比較言語学の入門にも適当であろうし，その反面，随所に新たな視点からの見解が散りばめられており，専門家にもまた益が多いことと信ずる。入門者を含めたわが国の同学諸兄にこの優れた業績を紹介するべく，不得手なフランス語からの訳出を決意した。原著者のアンドレ・マルチネ氏は寛大にも訳者の申し出に理解を示され，翻訳・印刷を快諾された。すでに準備段階での訳稿は原著の半分近くに達しているが，本誌の制限に従って今回は第Ⅰ章から第Ⅲ章までを掲載して戴くこととした。次号以降にも継続して掲載をお願いし，最終的に単行本として出版されることを望んでいる。

訳出及び註釈作成の過程で豊橋技術科学大学名誉教授土居敏雄，東京外国語大学助教授川口祐司，本学助教授新谷俊裕，同橋場弦，京都大学図書館司書赤井規晃の各氏に御教授あるいは資料の提供を賜った。記して深甚なる謝意を表する。

訳稿は，訳者が担当する本学大学院外国語学研究科の授業で，1996年度冬学期から始めた同書の講読の副産物である。当初の参加者は同研究科在学中（当時）の下郡健志，横井幸子の両氏，及び同研究科の修了者で本学非常勤講師の北岡千夏女史の３名であったが，大学院進学を目前に控えた山尾あすか，宮本順一郎の両氏が翌年１月よりこれに加わった。今回は神山の試訳及び註釈をほとんどそのまま採用したが，時に参加者，特に下郡氏の御意見を取り入れた箇所もある。

共同作業が実現され，近未来的に参加者との共訳となることを願う。

原著の価値を損なうことのないよう微力を傾けたつもりだが，あるいは不測の不備・誤謬があるかもしれない。大方各位のご叱正を賜れれば幸甚である。

凡　例

1．訳文は必ずしも原文に忠実ではない。入門者を含めた関係諸兄が参照される際の便宜を図るべく，日本語としての分かり易さを主とし，原文との逐語的一致を従とする指針を取ったからである。

2．本文中での訳者による付け加え，及び言い替えはそれぞれ【 】，【＝】の中に記した。

3．原註は脚註だが，印刷の都合に従い，章末にまとめて後註とした。原註の位置は[1]と記される。

4．前提知識が不十分な読者の便を図るため訳註を加えた。訳註は章末の原註の後に配置し，その位置は( )で記した。

5．相互参照の便のため，各パラグラフに番号を付した。

6．地名はなるべく慣用に従って仮名書きとした。一般的日本人には馴染みの薄い地名には読者の便を考えて適宜説明を加えた。研究者名は原文のままローマ字表記とした。

7．原著の方針に従い，本文ではラテン文字以外の文字を用いて表記される言語からの例もラテン文字に転写される。その方針については1.34を参照。ただし，訳註及び文末に訳註者の加えた参考文献一覧はこの限りではない。また，ギリシア，ラテン，サンスクリット（ヴェーダを含む）等について macron（¯）やアクセント符号が省略されている場合には，本文中であってもこれを補った。breve（˘）は特に記さない。

8．英名を例に取ると，palatal や palatalization 等が解剖学的名称 hard palate「硬口蓋」に対応する形として用いられる場合，しばしば行われる誤称「口蓋音，口蓋化」を採らず，「硬口蓋音，硬口蓋化」の訳語を一貫して用いる。例えば「軟口蓋音の口蓋化」とは「口蓋の一部である軟口蓋で調音される音が口蓋で調音される音になる」ということであるから，「スパゲティーをパスタにする」のように全く情報を持たない無意味な表現である。「口蓋」はその本来の意味である硬口蓋と軟口蓋の総称としてのみ用いられる。詳しくは神山(1995: 12, 247)を参照のこと。

9．言語名は下記のように略記される。ただし本文中では読みやすさを重んじ，煩わしい場合を除いて略記を施さないのを原則とした。

Arm.	アルメニア語	Mac.	マケドニア語(スラブ語)
Av.	アヴェスタ	OCS	古（代・期）教会スラブ語

BR	ベラルーシ語	OCz.	古（代・期）チェコ語
Br.	ブルトン語	OE	古英語
Celt.	ケルト祖語	OF	古仏語
CS	（後期）共通スラブ語	OHG	古高ドイツ語
Cz.	チェコ語	OIr.	古アイルランド語
Dan.	デンマーク語	OLat.	古ラテン語
dial.	方言	ON	古ノルド語
E	英語	ONF	古期北部フランス語
F	フランス語	OPr.	古プロシア語
G	ドイツ語	OR	古（代・期）ロシア語
Gmc.	ゲルマン祖語	OS	古サクソン語
GAv.	ガーサー・アヴェスタ	Pol.	ポーランド語
Gk.	（古典）ギリシア語	PS	（早期）スラブ祖語
Gmc.	ゲルマン祖語	R	ロシア語
Goth.	ゴート語	Rum.	ルーマニア語
Hitt.	ヒッタイト語	SCr.	セルビア・クロアチア語
IE	印欧祖語	Skr.	サンスクリット
Ir.	アイルランド語	Sln.	スロベニア語
It.	イタリア語	Sp.	スペイン語
Lat.	ラテン語	Sw.	スウェーデン語
Latv.	ラトビア語	Toch.	トカラ語
Lith.	リトアニア語	Uk.	ウクライナ語
Lyk.	リュキア語	W	ウェールズ語

前文（略）

第Ⅰ章
印欧語
いつ？　どこに？

1．1　我々が日常用いている語の大部分は，その語が使われている場面や分脈によって様々な意味を持ち得る。我々はこれに慣れており，これによって困惑することもない。【しかし】ある現象を細かく研究する際には事情は異なる。取り扱う対象を正確に言い表す必要があり，また，

その対象を指すために日常のことばを用語として用いるならば，その場合にその語の持つ色々な意味のうちのどれが用いられているのかを明確にする必要があろう。多くの場合に研究対象に対して新たな命名をする必要が生じるものだし，またこれはまさに印欧語に対しても生じたことである。最初にこの【印欧語という】用語を用いた人物は，この語にどんな意味を込めたのか，もちろん知っていたことであろう。しかし，当初この用語は仮定（vue de l'esprit）に基づいた命名であったため，時の流れの中でその時代や研究者，あるいは著者によって異なる様々な意味を担うことがあったのも当然である。それゆえ，本書の副題に用いたこの用語を何よりもまず最初に定義しておきたい。

１．２　まずは，形容詞の indo-européen「印欧(諸)語の」と，それに対する名詞とを区別しなければならない。形容詞の indo-européen は，すでに消滅した，文証されていない単一の言語【＝印欧(祖)語】から，規則的な発達によって生じたと考えられている諸言語を言い表すべく，作り出された用語である。これら印欧(諸)語は長い間大西洋からベンガル湾にかけての旧大陸に限られていたが，今日では第１あるいは第２言語として世界中で話されている。

１．３　したがって数多くの印欧諸語が存在し，その中にはフランス語や英語，ドイツ語やロシア語といった【有力な】言語の他に，ベンガル語やオセット語のようなあまり知られていない言語も含まれている。

１．４　【一方，】この形容詞から派生した l'indo-européen「印欧語」という名詞が意味するのは，大抵の場合【上記の】文証されない言語そのもの【＝印欧(祖)語】である。【例えば】「印欧語では『馬』を ekwos と言った」などという表現を用いることがある。しかし，比較言語学はこの場合にもっと厳密であって，【フランス語では】indo-européen commun「印欧共通(基) 語」と，英語では Proto-Indo-European「印欧祖語」と，ドイツ語では Urindogermanisch「インド・ゲルマン祖語」と呼ばれている。ドイツ人の間では，国際的に用いられ，かつ同じ意味を持つ Indoeuropäisch「インド・ヨーロッパ語」よりも，Indogermanisch「インド・ゲルマン語」が好まれているのである[1]。初期においては，この印欧祖語は，バラモンの神聖語であり，インドの教養語であるサンスクリットと大して変わらないものと認識されていた。サンスクリットと西方の古典語【複数】との比定を行う契機となり，比較言語学の誕生を促したのは，18世紀にヨーロッパ人によって他ならぬこの言語が発見されたことであった[2]。この新たな学問が誕生するとすぐに，サンスクリットと遠い昔に存在が想定された祖語とが同一ではありえないことが判明した。このことから，その後者【＝印欧祖語】を再建する際には，関係する諸言語に文証される諸特徴の中で，最も広く見られ，個々の言語の改新に帰すことが最も難しいものが採用されることになった。このようにして，「父」に対しては pətēr という形が再建され，そこには多数決によって語頭の p が採用されている。この p はラテン語の *p*ater，ギリシア語の *p*atér[3]，サンスクリットの *p*itá(r)[4] に現れているものであって，ゲルマン語の f（例えば英語の *f*ather）[5] やアルメニア語の h（*h*ayr）[6]，あるいはケルト語のゼロ（例えばアイルランド語のathir[7]）は

後代の弱化によって生じたものと解釈された。次の時代になると，再建された構造を解釈する試みが行われ，pətēr＝「父」という対応の更に以前の状態が考慮の対象になった。先ずは形態の面に関し，上記の再建形の中の -ə- は初原的な -eH-【1.33参照】という結合が無アクセント音節において弱化したものであると解釈された。ここでの H はいわば代数学で言う未知数のようなものである。続いて，意味の面で，pətēr は単なる「父親」ではなく，家父長制度における長を意味すると考えられた[8]。

1．5　20世紀初頭に，それまで知られていた印欧諸語と明かな親近性を示す，トカラ語やヒッタイト語のような新しい言語が発見された。この発見によって，どんな言語もそうであるように，印欧語も時の流れに従って発達したとする認識が広まり，一つの共通の幹から諸言語が相次いで分岐するという想定が可能であるどころか，もはや確実となった。現代の諸国語を完璧に安定しているものと思い込んでいる人もしばしばいるが，上のような状況となると，再建すべきなのは，もはやこのような完璧に安定している言語状態などではなく，太古から今日まで続く発達プロセス全体となる。したがって「印欧(祖)語」の概念が再度問題となり，これは，考古学の助けを借りれば，時間的・空間的にほぼ間違いなく特定できるであろう。今後はその言語を，絶えず発達を続ける言語であると考えなければならない。すなわち，この言語が話されていた共同体では，その構成部分の一部が分離して，別の場所で独立する傾向が絶えずあったのである。移動をしない，その他の構成部分どうしの間では，特定の地域で，特権的な関係が樹立される可能性があり，これは言語に関し特有の改新をもたらすことになる。この結果，一方では様々な方言が出現するが，また同時に，発生した分岐が失われることにもなろう。このような上げ潮と引き潮はどんな時代にもあるものであり，時間軸の上で考えた場合，安定した均一の言語が生まれた後の時点で，かつ後に文証されたりあるいは今日まで話されている諸言語が分離し，完全に独立する以前の時点を想像することは不可能である。結局は，消滅してしまった形態を再構成するのをあきらめねばならないのだろうか？答えは否である。ただし，再構成を行う場合には，それらの形態の各々が一つの段階に過ぎないことを常に肝に命じておかねばならない。上で例に出した pətēr という形態は孤立的なものではなく，pH°ters[9]と記される，より古い形と，より後代の古代文書や現代語に見られる諸形態との中間的な形態として想定されるべきものである。pətēr を発音することはないし，pH°ters ではさらにその傾向が著しいが，これはこれらの書き方が正確な音声的実現を表しているわけではないからである。これらの書き方がそれぞれ表しているのはいわば一種の化学式のようなもので，文証される様々な形態，及びこの段階と同様に再建される別の段階との間に想定される関係を，比較言語学的に吟味する際の出発点に過ぎない。

1．6　是非了解しておくべきなのは，ある段階から次の段階への推移によって，印欧語の領域が必ずしも分裂するわけではないということである。確かに西部印欧語は一つのグループを成すが，それは単に，地理的に西欧人とギリシア語あるいはスラブ語の言語的祖先との中間に住んでいた人々の用いていた言語形態が知られていないからに過ぎない。言い替えれば，このような段

階の設定は事実を反映しているというよりも，むしろ我々の現状での知識の限界を反映しているのである。

１．７　印欧語の領域が拡大すれば，そこには空白地帯（solutions de continuité），すなわち他の言語が話し続けられる広大な空間が必ず生じる。印欧語は，長期間にわたり，世界のいずれかの場所で，多数の異言語民族（allophones）との接触を持つ，支配層の言語であり続けたと考えられる。しかし，だからといって，このようにして形成された様々な言語島の支配層どうしの間での接触が分断される，ということには必ずしもならない。一例をあげると，紀元前第一千年紀の前半にケルト族はまだ，後のガリア及びヒスパニアに当たる地において，恐らくは少数派の新たな入植者であったが，【ケルト族どうしの】関係は，ピレネー山脈及び今日のバスク人の親類に当たるアクィタニア人の国を貫いて，要塞都市（オッピドゥム），すなわちケルト語で言う Verdun の点在するルートにより保持されたのである。[10]

１．８　当然ながら，これらの仮説の年代を推定して「いつ」の質問に正確に答え，そのときに何らかの種類の印欧語がどこにあったのかを判断しようとすれば，一方では，言語単位である事物と概念【との関係】を研究する，意味論的な再建と，他方では考古学的研究の成果の利用との両者が絶対的に必要である。

１．９　多くの比較言語学者は，外的データの助けを借りれば再建される言語がどこにあったのかを決定することが可能であるという点について，長い間懐疑的であった。このことを躊躇するのはとてもよく理解できる。人は，当然ながら，自分の能力の範囲を越えてリスクを冒すのを嫌うものだからである。初期において比較言語研究を行っていたのは多くの場合に文献学者であり，彼らは，言語事実を解釈しようとする際，現代の人類学や考古学のデータを用いるよりも，むしろ古典文明の文化についての知識から出発したがるのである。

１．10　彼ら【＝文献学者】の立場とすれば，考古学的データは進化論の観点から解釈されるべきものである。各々の文化は拡大あるいは縮小へと向かうプロセスとして捉えられるべきであり，その文化が存在する場所での，有史以前の諸変動や，多くの文書によって証明される諸発達，及び現代世界に見られる諸プロセスの間の関係を復元するために努力が傾けられねばならない。印欧語を話す諸民族は，技術的優位性を軍事に応用する点において，今日に至るまで先進性を保つすべを心得ているが，彼らの世界支配はインドとアイルランドの先住民の征服から始まった。この世界支配はアメリカ西部と北アジアの支配，及び植民地帝国主義によって終幕を迎えたわけではない。今日ではその支配は核の脅威によって続いているのである。様々な急変，前進と後退はあったが，紀元前第一千年紀の間のイタリア征服へとつながる春の遠征（expéditions printanières）[11] 以来，エルナン・コルテスの騎兵隊や，今世紀の40年代の装甲部隊，及びベトナムのナパーム弾に至るまで，印欧語族の世界支配は脈々と続いているのである。

１．11　過去の諸々の大文化は【征服民から色々な要素を取り込んだ結果】あたかもアマルガムのごとき様相を呈しているが，これらの限られた種類の大文化の観点からのみアプローチを行う

という態度を改めないことには印欧語の現象は見えてこない。これまでの考え方では，たった一回だけ印欧語が分裂し，そこから直ちに一定数の新たな民族が生じ，そしてこれらの民族は歴史に足跡を残しているがためによく知られている民族に一致するということになるが，このような理解はいかに抵抗が大きかろうと打破されねばならない。

1．12　例えばイタリアのヴェネト族やメッサピア族は，名前が知られているだけでなく，明らかに印欧語であるとわかる碑文等を残しているが，彼らのような民族のすぐそばに，我々の全く知らない，近隣族に征服され，あるいは吸収された，近親的言語を持つ，どれほど多くの他の民族が消滅せざるをえなかったことであろうか。どれほど多くの新たな接触が生じたことか。そして，初めは非常に異なっていたそれぞれのことばがこの接触によって接近し，ついには一つの言語の変種を構成するまでに至るのである。さらに，入植者の新たな環境への同化を説明するためには，言語の収束にどのような位置が与えられねばならないかが検討されることとなろう。

1．13　この章の題に記された二つの疑問に対する答を模索する前に，この章の第三の疑問を明らかにしなければならない。すなわち，印欧語を話していたのは，あるいは話しているのはいったい誰なのか，である。

1．14　純粋に言語学的な手がかりのみを考慮するのであれば，すなわち諸言語のきれいに構造化された部分だけを取り扱い，考古学的データを使えばもっとよくわかる意味内容には触れないのであれば，「誰が」と「どこで」の疑問に，並びに，精度のあまり良くない相対年代で構わないのなら，「いつ」の疑問に対する答えを試みることができよう。

1．15　第一の時代，すなわち先史時代において，印欧語は，そのグループに属していた，あるいは属していると今日認められている言語すべての（言語的）祖先に話されていた。当然ながら，「言語的祖先」は正確に特定されねばならない。なぜなら，現代を含めて歴史時代に印欧語を話していた，あるいは話している人々の祖先の大多数が，かつては他の諸言語を話していた可能性すらあるからである。

1．16　第二の時代，すなわち文書が残っている時代には，まず最初にアナトリア族とそれ以外の諸民族とが区別されるであろう。ヒッタイト族によって代表されるアナトリア族は，紀元前第三千年紀から第二千年紀に小アジアに移住したが，分離したのはそのずっと前なのかもしれない。それ以外の諸民族は，例えば女性と男性の区別を獲得するなどの，共通する改新を受けた点で，かなり閉じたグループを成している。

1．17　第三の時代には，上記の後者【すなわちアナトリア族以外の印欧語族】の中で，以下の二者の区別が生じた。その一方は，東にあって，舌背音(dorsales)[12]を硬口蓋化[13]させた諸民族，すなわち例えばラテン語の gnōscō「私は知る」に見られる g【[g]】を，z【[z]】や，フランス語の joli の j にあたる音【[ʒ]】，あるいは adjoint の dj にあたる音【[$d_ʒ$]】に転じた【いわゆるサタム語（5.5以下参照）を話す】諸民族であり，他方は，少なくともこの時点では，その k と g をそのまま保存し，主として西寄りに分布していた諸民族である。前者に含まれるの

は，後代にメソポタミアからベンガル湾にかけてのアジア地域に位置することとなるインド・イラン族や，アルメニア族，アルバニア族，そしてバルト族とスラブ族である。ギリシア語はこの硬口蓋化を受ておらず，例えば（gi)gnóskō「私は知る」はその g を保存したが，後のインド・イラン族のことばと長期間にわたって密接な接触状態にあったのは間違いない。

１．18　【いわゆるケントゥム語（5.5以下参照）である】西部印欧語は，最終的にはバルト海から地中海，及び大西洋にまで広がることになるが，ここには後のイタリック語派，ケルト語派，ゲルマン語派に発達する差異が萌芽の形で存在していた。

１．19　あまりにも長い間，「どこ」という疑問に答えようとする努力は，偏向した国粋主義者によって取り返しのつかないほど歪められてきた。彼らは各々印欧語族の故地を彼ら自身の現住地のなるたけ近くに設定しようとしたのである。ここではその居住地を，例えばブナの木の存在と結び付けようとする，ドイツ人研究者達の主張【4.8参照】に言及するつもりはない。この主張は「印欧人」の本来の領域を西に引き寄せるものであった。一方フランス人は，印欧語の起源をムーズ川とピレネー山脈の間に求めることを初めから諦めていたに相違なく，一般にこの問題に興味を示さなかった(14)。

１．20　ここ数十年間に，特に発掘物の年代決定に関する考古学的研究，及び新たな地点の合理的探索によって大きな進歩が成し遂げられ，このおかげで，今日では，この【印欧語族の故地に関する】研究史上はじめて，言語学的データと考古学的データとが結びつくようになった。これは必ずしも人を確信に至らしめるとは言わないまでも，注目に値することである。

１．21　この方面での先駆的研究は Marija Gimbutas 女史の手になるものであり，私が以下の概説を記す際に依拠したのは，主として他ならぬ彼女の著作である。[1] ここでは私自身の主張を正当化しようというつもりは全くない。採用した視点の是非を判断できるのは再建の専門家だけであろうが，今のところは彼らの反論に目をつぶっておくことにする。そもそも学説というものはすべて，問題の精密化と反論を引き起こすものである。しかし，こと専門家に限らず，一般大衆に学説を紹介する際に主眼とできるのは，考え方の基礎と，何らかのデータが整理されうる枠組みを提示することのみである。このような場合には図式化（schématisme）や，さらには二元論（manichéisme）さえも用いてよかろう。本書の読者の方々には，単純化した，時には乱暴な私の説明を，それぞれお好みの取り方をなさって戴きたいと思う。

１．22　紀元前五千年には，印欧語族は今日のロシアの南東部，いわゆるクルガン（kourganes）(15)【4.20以下参照】の地域にあった。クルガンとは首領と想像される人物の遺骸を葬った塚のことであり，その遺骸の周りには装飾品，それもしばしば豪華なものと，一定数の若い女性と奴隷の遺骸が配置されている。少々本筋からはずれて，死者の未亡人と側近の【殉】死の意味を社会学的あるいは宗教的に考えてみると，このような行いが，周囲の者達による犯罪の企てをことごとく防止する上で，効果的だったことが理解される。ここにあったのは高度に階層化された家父長制社会であり，これは意味論的再建から期待されるような社会とも一致する。このような墓はヨー

ロッパ中に，今日の中部ドイツにあたる地にも発見されることとなる。しかし，西に移動するに従って，その年代は新しくなり，装飾品も，殉死者の数も少なくなっていく。これによって，征服の圧力が数々の地域を通って【南東ロシアから】西の方角へ及んだことが見て取れる。征服されたとおぼしき地域の墓を調べてみると，征服以前にはおのおのが自分の墓を持ち，一人づつ埋葬されており，生前のことはさておくとしても，一般的に死後は征服後よりも平等であったらしい[16]。

1．23　クルガンの家父長制は，僧侶，戦士，牧人の三つの社会的身分を反映する，本質的に男性的パンテオンであったらしい。確かに，初期にこの地にいたのは，自分自身で耕作して新たな富を生み出すわけではなく，あちこち徘徊してみつけたものから利益を得て生活する遊牧民であった。彼らは畜産で身を立てていたには違いないが，ある意味では狩猟民のままであった。馬は上に乗るよりも，馬車などをつないで利用されたが，この馬が彼らの拡大に重要な役割を果たすこととなる。

1．24　このクルガン民族は，紀元前第四千年以前から紀元前第三千年以降までと推定される期間に，すなわちほぼ千五百年間にわたり，連続する三つの波となって西進し，今日のドナウ平原及びバルカン半島にあたる地帯に到達する【4.27以下参照】。ここにあった先行文明は家母長制であって，農耕が行われていた【4.23参照】。すなわちクルガン民族とは文化的に全く正反対であり，豊饒の女神が崇拝されていた。確かに印欧人は最終的には自分達の言語，及び自分達のパンテオンの主人の一部を【被征服民に】おしつけることになるが，アマルガムが形成されなかったわけではない。両者の要素が混じり合うことによって，雷（いかずち）の神や戦の神【のような男性的神々】と並んで，ガイア，デーメーテール，ペルセポネー，アテーネー，あるいはウェヌス，ユーノー，フレイヤ[17]【のような女性的神々】がもたらされることになった。これらの女神は，女性が何よりもまず「戦いの安らぎ」あるいは「勇者の支え」として意識される社会に特有のものである。

1．25　その先史の中で，アナトリア族と，より後代のインド・イラン族の分離をどの段階に置くべきかを検討しなければならない。

1．26　彼らがどのルートを通ってクルガンのステップから小アジアに至ったのか，思いを巡らすことができる。ここに居を定めることになるアナトリア族はコーカサスと黒海の東岸を通ったと考えられよう。一方，インド・イラン族は，ここを経てイランとインドに向かうことになるが，ここに至るまでは【コーカサスよりも】むしろバルカン半島を通ったのではないかと思われる。そう考えたほうが，ギリシア語とサンスクリットの顕著な構造的類似性が説明しやすくなる。いずれにせよ，ここに記す仮説の中で，アナトリア族とインド・イラン族の問題に関する部分は，ヨーロッパの印欧語化の部分よりも信憑性に劣りそうである。[2]

1．27　さて，紀元前五千年以前の印欧人をどう考えたらいいのだろうか。Nikolai Trubetzkoy[3][18]は，印欧人が色々な民族のアマルガムによって生じたとする仮説を提示した。この仮説によれば，散見されるある種の言語的不均一（hétérogénéités）が説明されることとなる。例えば，驚くべ

きことに，古代の印欧語（アナトリア語は，残された文書に該当する証拠が現れないため，ここでは除外しておく）に対して再建が可能な数少ない数詞である，１から100までの数詞において，現れる閉鎖音は，伝統的な呼称で言う無声音か有声音だけであり，「有声帯気音」は生じない。例えばギリシア語の1から10は heîs, dúo, treîs, téttares, pénte, hex, heptá, októ, ennéa, déka であり，20は eíkosi, 100は hekatón である。ここには【祖語に】帯気閉鎖音があったことの証拠となる ph, th, kh は現れていない。一方，語彙目録においては，この帯気音の出現頻度は無声音のそれと同様であり，単純な有声音のそれをはるかに上回っているのである。したがって，数詞は，基礎的な語彙をもたらしたのとは異なる言語に由来すると考えられるが，異なる言語を持つ二民族のアマルガムを想定するよりも，むしろこの【数詞の】体系が借用されたとする想定のほうが有望ではないかと思われる。

１．28　Vittore Pisani[4] は，最初，ステップをさまよう好戦的遊牧民とコーカサス出身の僧侶とが合一したと考えた。しばしばコーカサスの干渉が好んで取り上げられるが，その根拠は単なる地理的な近さなのかもしれない。しかし，実は，この言語【＝印欧語】の非常に古い段階に想定される音韻及び統語構造についてある種の仮説があって，コーカサスが引き合いに出されるのは特にこれを正当化せんがためなのである。

１．29　後述するように，今日では，例えばフランス語にもあるような【印欧語の】b, d, g のタイプの有声子音は，もともと声門化音[5]，すなわち声門の閉鎖を伴う音であったと考えられている(19)。一方，旧大陸の西側の地域において，今日声門化音を持っているのはコーカサス諸語のみである。しかし，現代の諸研究により明らかとなったように，現在のところ古代の印欧語に対し想定されているこのタイプの音は，閉鎖音に三系列を持つ体系においては頻繁に生じるのである。結局のところ，コーカサスを初めとした声門化を生じる地域に印欧語を結び付ける必要性は全くない。現代セム諸語の「強調音」の起源としても同じように声門化音が想定されている点に御注目戴きたい[6]。

１．30　統語論の領域においては，印欧語の非常に古い段階に対し能格構造が年来検討されている。これは，動作主（agent）が受動主（patient）と同じ分脈(20)にあるときには有標的な形態【＝能格】で表され，他方，受動主は語尾も助詞も伴わない，全く機能的指標を持たない形態【＝絶対格】で現れる，という構造である。(21) この点に関しても，コーカサス諸語は印欧語の非常に古い段階に想定される特徴を示すのである。しかし，このような能格構造は世界中に広く見られる現象であり，考えてみれば，これも現代ヨーロッパ諸語でなじみの深い目的語を持つ構造と同様に「論理的」に見える。[7]

１．31　古代の印欧人と同時代のコーカサス諸民族との接触の可能性を否定するつもりはさらさらないが，今日に至るまでそれを裏付ける確実な痕跡は何も報告されていない。非常に古い時代に対し【両者の】構造的類似性が指摘され得るからと言って，彼らが起源的に共通であるとも，ある時期に同じ場所に住んでいたとも言えるわけではなかろう。

1．32　セム・ハム諸語やフィン・ウゴール諸語との比定も以前より行われてきた。前者は今日ではペルシア湾からマグレブに至る地帯に行われており，後者はハンガリーや北部ユーラシア地方において，あるいは，一説によると[8]，さらにカリフォルニア中央部のインディアンにも話されている。しかし，このような比定は仮説の域に留まっており，その証明はこれまで為されていないし，恐らくこれからも不可能であろう[9]。

1．33　これまでにも，比較や仮説によって得られる再建形が何度か登場した。以下ではこのような再建形が頻繁に登場する。再建形の前には慣用に従いアステリスク【*】が置かれ，これによってその形態が現存するいかなる文書，写本あるいは碑文等にも文証されないことが示される。これらの再建形を発音しようとすれば，文字が大概の場合フランス語の場合と同じ価値を持っていることが会得されよう。ただし u は ch*ou* の ou【[u]】のように，e は *été* の é【[e]】あるいは après の è【[ɛ]】のように読む。ei, eu, oi, ou では両方の文字が発音される。ə という記号は je n'veux pas の「無音の e」(e muet)[22] のように読んでよい。行の下の小さな o【むしろ丸。】は一般的に【母音交替の】「【ゼロ】階梯」について用いられ，できるだけ短く発音された前記と同様の母音に相当する[23]。H には右下に付けられた番号によって異なる発音が与えられる。H_2 はドイツ語の Ba*ch* の ch あるいはスペイン語の *j*amás の j【[χ]】[24]のように，H_3 はスペイン語の *Ju*an の Ju【[χ^w]】のように読んでいいだろう。H_1 は実際上【フランス語で言う】無音の h (h muet)のように扱ってよかろう[25]。

1．34　音声表記は原則として国際音声記号(alphabet phonétique international)【＝International Phonetic Alphabet: IPA】によって行われる。シュー音に対しては，曲アクセント記号(circonflexe) をひっくり返した記号【ˇ】を上にのせた形，[š] [ž]【＝[ʃ] [ʒ]】が好んで用いられる。これらはそれぞれフランス語の ch と j にあたる。英語の *th*in やスペイン語の *c*inco の語頭の子音【[θ]】に対しては，ゲルマン語の【ルーン文字】ソーン(【英語】thorn) þ が好まれてきたが，様々な理由から本書では引用する際にギリシア語のテータ【θ】を用いる。学童が時に「葉巻」と呼ぶやつである。表記法の慣用に敢えて背いた場合もあるが，それも，文字をフランス語風に読むことに慣れている読者のために良かれと考えてのことである。例えば「言語」はロシア語で正しくは jazyk だが，【フランス人読者にとっては】iazyk と表記したほうがわかりやすかろう[26]。スクウェア・ブラケット(crochets carrés)【[ ]】にはさまれた表記は厳密な発音を表し，スラッシュ(barres obliques)【/ /】にはさまれていれば当該言語の弁別的単位【＝音素】を表している。通例イタリック体で記されるのは，アステリスクの付いた形と，様々な言語からの引用語である。ラテン文字を用いて書かれる言語の単語は，そのまま慣用に従って記される。通例その他の文字で書かれる言語の単語は，その個々の文字を一つの（場合によっては二つの）ラテン文字に置き換えて転写される。日本語や中国語のような表意文字で書かれる言語には，ラテン文字への一般的転写法があるのでそれに従う。

1．35　調音のタイプや音声表記について詳しくは，原著pp.261-263の表を参照されたい。

１．36　再建形であれ，古代語であれ，印欧語の形態を記す際には，フレーズの中でその語が果たす【統語的】役割によって形を変えてしまう末尾の部分には触れずに，語根を扱うためである場合が多い。この場合に，記された形が語根であることを表示するために，例えば*newo-「９，新しい」のように末尾にハイフンを付けた形を記す。ハイフンのない*newo は，語が裸の，語尾のない形で用いられ得た時代の形である。ハイフンは，また語をその構成要素【＝形態素】に分析した結果を表示するためにもよく用いられる。例えば*owi-o-m は owi-「羊」，形容詞的な接尾辞[27]である -o-，中性の主格あるいは対格の語尾 -m の３つの部分から成っている。

１．37　音声変化に関して「規則的に」(régulièrement)という副詞が用いられることがあるが，これは当該の言語あるいは時代において，その変化が必然的であって，したがって予見可能であることを示す。この副詞がない場合には，例えば他の形態からの類推のような，特別な処理が行われていることが含意されている。当然のことではあるが，これらの変化のすべてに対して，確実な証拠となる資料を提供できるわけではない。読者諸氏には著者を信用して戴くようお願いする以外にない。この問題については以下の第Ⅵ章で詳述する。

１．38　印欧語の拡大の契機となった様々な出来事や，唯一の祖語から多くの異なる言語を生み出すこととなった言語的な改新の生じた時期を正確に特定することは容易ではない。世紀や千年紀の場合は，例えば15世紀とか第二千年紀というふうに，一般的に年代的順序の番号を使って行う。その際，コンテキストから自明の場合には，紀元後なのか紀元前なのかの記載を省略した。正確にであれ，概略的にであれ，ある年を特定できる場合に，紀元前の年の前にマイナス記号を用いることがある。例えば－106はイエス・キリストが生まれたとされる日の106年前，すなわちこの日から逆に数えて第二番目の【＝紀元前２】世紀が終わる６年前を指す。

原　註

［1］【Gimbutas女史による】特に以下の研究を参照のこと。

Die Indoeuropäer, A. Scherer(hrsg.) *Die Urheimat der Indogermanen*, Darmstadt, 1968, pp.538-571.

The first wave of Eurasian Steppe Pastoralists into Copper Age Europe. *The Journal of Indo-European Studies*, vol. 5, 1977, pp. 277-338.

The Kurgan wave 2.(c. 3400-3200 B.C.) into Europe and the following transformation of culture, 同誌 vol.8, 1980, pp. 273-315.

Old Europe in the fifth millennium B.C., The European situation on the arrival of Indo-Europeans, Edgar C. Polomé (red.) *The Indo-Europeans in the fourth and third millennia*, Ann Arbor, Michigan, Karoma, 1982, pp.1-60.

以下で *The Indo-Europeans...* という略称で引用する最後の文献に補足的な参考文献が載っている。これらはル・モンド紙1983年１月28日に載った Patrice Leclercq 氏の記事「誇りの道 (Les chemins de l'orgueil)」に引用されている。

［2］例えば以下を参照されたい。Homer L. Thomas, Archeological evidence for the migrations of the Indo-Europeans, *The Indo-Europeans*...pp. 61-86.

[3] Gedanken über das Indogermanenproblem, *Acta linguistica* I, pp. 81-89.
[4] *Indogermanisch und Europäer*, München, 1974.
[5] André Martinet, La palatalisation 《spontanée》 de *g* en arabe, *B.S.L.*, 54(1959), pp. 90-102. 参照。これは *Evolution des langues et reconstruction*, Paris, P.U.F., pp. 233-247 に再録されている。声門化された k が g に転じる点についての記載は p. 241 にある。
[6] 小文の著者による以下の解説を参照：Remarques sur le consonantisme sémitique, B.S.L. 49(1953), pp. 67-78. 同文は *Evolution...*, pp. 248-261 に再録されている。
[7] 例えば André Martinet, *Syntaxe générale*, Paris, 1985, §8-14から8-18を参照。
[8] Otto Sadovszkyによる【この点に関する】研究は1976年に "Report on the state of Uralo-Penutian Research" (*Ural-Altaische Jahrbücher*, Wiesbaden, 48, pp. 191-204) から始まった。Contributions to an Ob-Ugrian-Maidaun Comparative Grammar が近刊予定である。
[9] N. D. Andreev が *Ranneindoevropejskij prajazyk* (Leningrad, 1986) で行った大胆な試みを記しておく。彼によると，ユーラシア北部の諸言語は一つの源である北極祖語（proto-boréal）に遡り，印欧語もそこから派生したとされる。

訳　註

（1）これらの用語の変遷については風間(1978: 45-50)を参照されたい。7．3参照。
（2）文字通り「発見」されたのはずっと以前のことであるが，ここでは Sir William Jones の業績が含意されているものと思われる。
（3）語幹は pater-（<*pəter-）．単数主格で語尾を加えずに語幹末音節の延長が行われている。訳註8参照。
（4）語幹は pitar-（<*pəter-）．単数主格は pitā だが，ギリシア語の場合と同様にして*pitār が作られ，さらに末尾の r が脱落したと考えられる。訳註8参照。
（5）ゲルマン第一次子音推移あるいはグリムの法則と呼ばれる。5.61参照。
（6）*t は母音間で規則的に y で現れる。また，アルメニア語が経験した改新によって強いストレスアクセントが次末音節に固定され，その結果非アクセント音節にある母音は多少の例外を除いて一般に脱落してしまう。Schmitt (1981: 37f., 59). 強いストレスアクセントを持つ言語における非アクセント音節の弱化と脱落については神山 (1995: 188ff.) を参照。
（7）主として母音の間の位置で子音の調音が弱まる緩音化（lenition, 5.84以下参照）と呼ばれる現象のため，母音間等の IE *t はアイルランド語において*[θ]を経て[h]となり，th と綴られる。Lewis-Pedersen (1937: 45f., 127ff.) 等を参照。本書に限らず現代アイルランド語からの引用語はこの場合のように旧正書法で記されることが多い。綴りと発音との関係をある程度明確化するために1948年に定められた現正書法に従えば athair と書かれる。その発音は，現代アイルランド語の発音の唯一の典拠たる Rialtas na hÉireann (1986) では／ahər'／【＝／áhərʲ／】のように音韻表記されるが，実際には幾種類かの発音が許容されており，例えばDillon-Cróinín (1961) には[ahir']【＝[áhirʲ]】が載せられている。以下でアイルランド語の発音について言及する際には，狭音（slender, Ir. caol／ki:l／）を表す（'）を硬口蓋化を表す一般的表記法である（ʲ）に改める。
（8）語幹は*pə-ter- と分析され，前要素は *pā- "to protect, feed" (Watkins 46)（<*peH₂-）の本来的にアクセントを受けずに母音を失ったと想像される形（ゼロ階梯；∵*Ḫ>*ə）を，後者は人を表すと考えられる。他方*pō(i)-から説明しようとする解釈もあり，この点を含めて風間 (1984: 50ff.; 1987: 209ff.) を参照されたい。Laryngeals とも呼ばれる音韻 H については本書1.33, 9.30以下，あるいは高津 (1954: 122ff.), Winter (1965), Lindeman (1987), Bammesberger (1988)等を参照。
（9）H°は Ḫ と表記されるのが一般的。単数主格に語尾 -s が本来的にあり，語末の子音結合が簡略化を受けてこれが脱落したときに，先行する母音が代償延長を受けたと原著者はみなしている。
(10) Verdun の語源については3.11に記載されているので参照されたい。Verdunはラテン語の oppidum で呼びかえられるのが普通となっているらしい。

(11) 伝説によればロムルスとレムスだけであったとされるが，いずれにせよひとにぎりの青年から成るラテン人入植団が，一族の住むアルバ・ロンガを出て，紀元前753年4月21日，後のローマにあたる地に達し，町の建設を開始した。後にイタリア全土のローマ人支配の発端となったこの出来事が含意されているものと思われる。モンタネッリ(1976: 13-19)参照。

(12) ここでは硬口蓋化した軟口蓋音[kʲ][gʲ]等，すなわち一般に palato-velars と説かれる音が含意されている。これは硬口蓋音[c][ɟ]等とみなしてよかろう。

(13) これが普通の呼び方だが，調音点の前進と調音様式の変更とが行われるため，より正確には「硬口蓋化と歯擦音化」とされるべきである。

(14) この点については第Ⅳ章に詳しい。

(15) <R курган「塚」<古トルコ語 kuryan。Шанский (1963－; 8: 452). 訳語としては「高塚墳」や単なる「古墳」も用いられる。

(16) Gimbutas女史に始まるクルガン文化の研究については，わが国ではすでに森安(1987)や風間(1993)等に多少とも紹介されている。参照されたい。

(17) 初めの四者はギリシア神話，続く二者はローマ神話，最後は北欧神話。

(18) 通常の綴に改めた。原著では Nikolas となっているが誤植であろう。

(19) このような提案は旧ソ連の印欧語学者GamkrelidzeとIvanovによってなされた。Гамкрелидзе-Иванов (1984) 及び山口 (1995) を参照のこと。本書ではこの点について9.83以降に述べられている。

(20) すなわち現代ヨーロッパ語のような主格・対格構造（訳註21参照）を持つ言語の他動詞構文にあたる。

(21) 現代ヨーロッパ語等でなじみの深い類型では動作主は無標の形（主格）で，受動主は有標の形（対格）で現れるのが普通で，このような類型は対格構造あるいは主格構造のように呼ばれる。ただし，ここで言う能格は Klimov の言うところの活格（active case）を含んでいる。能格構造と活格構造の相違，その通時的発達の可能性等については山口 (1995) 第Ⅰ及び第Ⅳ章を参照。

(22) 文字通りにはこの箇所は不可解である。Grammont のいわゆる三子音の法則によって Je ne̥ veux pas の下線部は確かに発音されないのが普通（∴無音の e）だが，ə が無音の e と同じとすると，ə は音価を持たないことになってしまう。分脈上意図されているのは明らかに「有音の」e である。ただし，このような e の音価は [ə] と記されるのが慣用だが，この表記はかなり簡略的である。この点については神山 (1995: 131ff.) 等を参照。

(23) 前提知識を持たないフランス人読者向けの説明である。実際に行われた音声実現については知るすべもないが，音韻論的には丸の上に書かれた子音字m̥，n̥，r̥，l̥ が一般の母音と同様に音節を担っていたと考えられている。

(24) 通常は単に [x] と記されるが，標準的なものよりも若干後ろ寄りのため，より正確には [x̟] あるいは [χ] とされねばならない。神山 (1995: 51f.) 参照。以下では [χ] のみを記すことにする。

(25) これらの H (laryngeals) の音価については諸説が様々ある。有声の場合と無声の場合とがあって複雑だが，本文に従い無声の場合のみに限って原著者の説を略述すると，H_2，H_3 は隣接母音をそれぞれ a，o に変える効果を持つため，これらの母音と最も調音が近いと考えられる[χ]，[χʷ]がそれぞれ有力な候補となる。一方，H_1 は隣接母音の質を変えない効果を持つため単なる [h] やあるいは声門閉鎖音 [ʔ] であった公算が高い。この点については9.30以降に詳述されている。異論等については同所に訳註を加える予定である。また，論旨上，本文に記された「無音の h」は「有音の h」に訂正されるべきである。

(26) 発音表記とは言えないので原文の [ ] は外した。

(27) 伝統的な呼称では幹母音あるいはテーマ。

第Ⅱ章
民族の暮らしと移動

2．1　再建しようとしている言語状態（état de langue）がいつのことであるのか，及びそれを用いる社会とそれに対応する文化がどうなっていたのかを，偶然に頼って言い当てることなど不可能であるため，我々は印欧語の現象に対し動的な視点を持たねばならない。したがって，比較的安定している時代よりも，我々の注意を引きつけるのは，言語的にであれ，文化的にであれ，進化のプロセスと，当然のことだが，移動である。移動によって，それまで存在していたつながりが断たれ，新たな接触が生まれる。これによって一方では分岐的発達が，他方では収束的発達が生じる。

2．2　伝統的な歴史観に従えば，住民の移動は，必ずしも破滅ではないにせよ，少なくとも，安定した社会の平静を乱す，忌むべき出来事であると考えられている。今世紀の50年頃から20余年間にわたってマグレブ人やトルコ人その他の異民族が西あるいは中央ヨーロッパにやって来たが，この場合のように移動がそこにもとからいる人々の発意による場合であっても，その結果として遅かれ早かれ問題が生じるものである。ゲルマン人のことを考えてみると，彼らは平和裡のうちにローマ帝国内の自由小作人（colons）となったが，彼らが発端となって，堰を切ったように大移動が開始された。歴史というものは，大抵の場合，大挙して訪れた入植者の到来によって被害を受けた国の立場から書かれており，その移動を引き起こした状況よりも，その到来の結果が扱われるのが常である。我々の観点は必然的に全くこれと異なる。なぜなら，先住民のアイデンティティーや文化，あるいは人種にも大いに関心を持つにせよ，我々の関心の中心は初めはこれらの侵略者にあるからである。言い替えれば，印欧語を話す民族がなぜ移動を始めたのかを考えることこそ我々の最優先課題なのである。

2．3　ものごとの原因を研究したがらない研究者も数多くいるが，そのわけは，どんなにつまらないことであったにせよ，そもそも現象というものはすべて，無数の原因の総合的な結果（point d'incidence）として生じるのであり，それらの個々の原因の大部分は証明することも，さらには単に確認することさえ，時を経ればすぐにできなくなってしまうものだからである。しかしながら，原因の研究に取り組むうまい方法がある。つまり，様々な原因の中から可能性の高いものを特定し，いずれの場合にも，該当の現象を引き起こす上で，あるいは単に引き起こすのを助長するという点で，それがどの程度関わり得たかを検討するのである。

2．4　イスラムの拡大を例に取ってみよう。この出来事は聖遷（ヒジュラ）（Hégire）[1] が行われた後，西暦7世紀と8世紀に起こり，その結果アラブ人が大西洋にまで到達した。一見したところでは，この拡大は新たな宗教が出現し，盛んに布教されたことによって引き起こされたように思える。しかし，その一番の，そして唯一の原因がアッラーの意志の中にあると認めないとしたら，特別な条件の複合を想定することが必要となり，ムハンマドの布教はその条件の一つに過ぎなくなる。

この拡大によって多くの人的氾濫のうちの一つである，アラビアで生じた人的氾濫に特別な余裕がもたらされた。この半島は半ば砂漠であるが，スカンディナヴィアと同じくらい，あるいはそれ以上に officīna gentium【「子孫の工場」】[1]，すなわち人間を作り出す工場の名に値していた。ここは天然資源が限られていて，豊かな国の近くに位置する広大な土地の典型であった。豊かな国とはこの場合にはメソポタミアである。そこは繰り返し生じる文明の坩堝であって，飢饉を和らげ，さらにはそれを減らす改新がそこから周りの国々にもたらされた。頻繁に生じる【食料の】不足は，まさに自然の繁殖力，すなわち女性が受胎可能な間に子供を生む能力に対するバランスウェート（contrepoids）であった。食料不足が緩和され，あるいはさらになくなってしまえば，いわゆる人口爆発が生じる。言い替えれば人口が異常な速さでふくれあがり，ついには拡大を始めるのである。

２．５　これと同じような状況が紀元後の時代が始まった頃にヨーロッパにおいて生じたと思われる。そこではローマ帝国が大量の新しい技術を集中し，そして各地に広めた。そのため，天然資源がそれまで以上によく利用され，ついには生活条件が一般に改善された。ローマ化された諸民族の出生率は低下するのだが，まだこの影響を受けずに，自然の繁殖力を保持していた近隣諸民族，すなわちバスク族，ゲルマン族その他のもとでは，この結果，相当な人口増加が起こり，国境地帯を常に圧迫するようになった。ローマ軍が撤退した後，そのあふれ出た人々（débordement）は異民族の侵入（invasions barbares）と呼ばれることになった。もっと規模の小さな例をあげると，バスク族はピレネー山脈とカンタブリカ山脈の険しい，鬱蒼とした地帯に住んでいたため同化を免れたが，彼らはガロンヌ川にまで押し寄せ，ガスコーニュ（ヴァスコニア）【原義はバスクの国】を形成し，南西方向にはブルゴス付近にまで至った。南西方向へのバスク族拡大の結果として，カスティリア語は決定的な影響を受け，【イベリア】半島の他のことばと非常に異なる言語となったのである。[2] (2)

２．６　出産制限ができていない場所ではどこでも子供がたくさん生まれるが，かつては農業技術の進歩によって食料不足が軽減され，子供の命が守られていた。現在の社会ではこの役割を負っているのは医学の進歩である。このようにして，第三世界に見られる人口急増が生じる。周知のように，気候条件が特に悪いところでは，飢饉は一掃されていない。例えば，【サハラ砂漠近隣の】サヘルでは何千という単位で人が死んでいる。確かに，物質的条件が一般的に改善されれば，いわゆる「発展途中の」国々に相当高い密度で居住する人々の命を守ることができるであろう。しかしながら，先進国の富とそれに続く国々の貧困との差によって不均衡が生まれており，自由流通に対する制限のためにこれが解決できない。この不均衡のために様々な暴力が起きる可能性がある。

２．７　約言するに，「異民族の侵入」，言い替えれば，占領者がより生活レベルの高い国に押し寄せることは，消費物資や侵略の道具の点では新たな技術の恩恵を受けていても，出産制限の点ではまだ影響を受けていない民族の側の人口爆発によって引き起こされる可能性がある。しかし，

発達の頂点にいる国々でも，避妊方法の知識と実践が万人に及んでいるとは言い難い。こうして人口超過が生じ，溢れた人々を国外に送り出す気運が高まるのであろう。このため植民地が生まれ，そこでは土着民を物理的に排除したり，彼らを奴隷の地位に落としめたり，あるいは彼らをその土地の中でも荒れ果てた地域に追いやったりすることが行われる。これに開発植民地の獲得と新たな市場の支配を加えれば，現代世界における拡大の完全な縮図が得られる。我々の扱う時代におけるこのような植民地の重要度が小さかったことはまちがいない。

２．８　民族移動によって生じる言語的結果は，当然だが，数々の要因に依存している。その中では，まず第一に，接触を行う各々の人間グループの力関係が考慮されねばならない。多数派であって裕福な民族と接触する場合，少数で資力に乏しい種族が自らの言語を押し通せる可能性は全くない。一方の言語がそのライバルに対して勝利をおさめるのに寄与する要因の一つとして，文化程度に焦点をあてることができよう。例えば，ガリアの地においてロマンス語がゲルマン語に勝利をおさめることができたのは，前者がラテン文化の仲介者であったからである。しかし，これらの二つの言語の境界線を明らかにするためには，当然ながら両者の話者の数を考慮に入れる必要がある。ラテン語はロマンス語の形でパリやソワソンばかりか，今日ではドイツ語が話されるザンクト・ガレンやライヒェナウでも文化語であった。しかし，東部ではラテン語は文化語に他ならず，他方，西部ではラテン語は多数派の日常語であったのである。

２．９　この点で最も決定的な要因の一つが，到来者の側の男女比である。彼らが奥方や，あるいは普通には家族全員を連れ，財産を持参するのであれば，彼らの子孫が，たとえ一時的にであっても，自分達の言語を話し続ける可能性は大いにある。その逆に，男たちだけが独身でやって来て，即座に，性的なものを含めて自分のあらゆる欲求を満たす手段を現地調達するつもりの場合には，新たな接触から生まれる子供達は父親の言語よりも母親の言語を話す可能性がすこぶる高い。父親は自分の子孫の教育に関わるよりも，むしろ新たな居住地を支配することに腐心するからである。デンマーク語を話すノルマン人の略奪者がネウストリア【＝後のノルマンディー】に公に腰を据えたのは911年のことである。しかし，1066年にギヨーム王【＝征服王ウィリアム】が英国王位に対する権利を行使するため英仏海峡を渡ったとき【＝いわゆるノルマン人の征服】には，一行はもうフランス語を話していた。

２．10　ノルマンディーの場合と対比して，ペリゴール【＝現在のドルドンニュ】の場合を考えてみよう。この場合にも，その地名が入植者の起源を物語っている。ノルマンディーというのは「北（デンマーク語nord）の人（デンマーク語mand）」の国ということであり，ペリゴールは「４つの（ガリア語 petru-）進軍する（ガリア語-corii）」部族が腰を据えた地域である。付け加えれば petru- というのはラテン語の quattuor（＞フランス語 quatre）と規則的に対応するケルト語の形である[3]。一方 corii は corios の複数形であって，この語根はドイツ語の Heer「軍」にも見られる[4]が，この語は明らかに軍勢だけを意味するのではなく，新たな領地を獲得すべく，家族を連れ，武器，荷物を持参して移動する人間グループの総体を指している。この場合に，目

論見が成功すれば，この種族が自分達の言語を捨てるなどまず考えられない。先住者が降伏するつもりなどさらさらない場合には，恐らく迂回するのかもしれないが，先住者は十中八九駆逐され，あるいは奴隷の地位に落としめられるのであろう。女はまず間違いなく二つの意味で「やさしく」別格に扱われる。すなわち丁重な態度で接せられることもあろうが，情事の相手としても扱われるのである。彼女らの子供は奴隷の身分となり，征服者の言語を覚えて行く。

２．11　集団での部族の移動は，他の民族に追い払われることから生じることもある。ローマ人がガリアと呼ぶことになる場所に居を定めたケルト人は，ゲルマン人の圧力にさらされて，再三この種の移動を行ったようである。例えば，後にラングドックのローヌ川とトゥルーズの間に定住するウォルカエ（Volques）族は，非常に古くは中部ドイツにいて，ゲルマン人と直接に接触していた。ゲルマン人は彼らの名である wolkai を南の隣接民族の一般的名称として用いた。これが規則的に walh-【OHG Walh】となり，後にスラブ人に借用されて，ローマ化されたケルト人とバルカン半島に住むロマンス語の話し手一般を指すようになった。スラブ語での形は vlach と valach であり，前者はユーゴスラビア【∵当時】の遊牧羊飼いを表し[5]，後者はワラキア(Valachie)【R Вала́хия, G Walache】の名に現れている。ゲルマン語で生きながらえたのは派生形容詞の walh-isk- であり，ここから【E】Welsh や【G】welsch が生じる。この語は英語ではケルト語を話すウェールズ人【あるいはその言語】を，ドイツ語ではロマンス語を話すスイス人【あるいはさらにロマンス語一般】をそれぞれ表している。

２．12　ゲルマン人の西進を引き起こす決定的な要因となったのは，５世紀から６世紀に起こったフン族[6]のヨーロッパへの到来であった。どのような状況のもとでフン族が西に押し寄せたのかを詳しく研究するのは断念せざるを得ない。彼らは中国人に敗北を喫し【て西に敗走し】たのであろうと考えられている[7]。この問題を解明するには，個々の紛争において，一方の軍勢が他方より優位となったのはどのような新たな技術によってなのかを決定する必要があろう。すなわち金属や新たな合金の利用なのか，馬に乗ることなのか，あるいは【古代の二輪】戦車（チャリオット），鐙（これにより騎乗時に剣の使用が可能になる），弓，投石機，弩（おおゆみ）（クロスボー），火薬，戦車（タンク），原子爆弾などの発明なのかをである。もちろんここには新たな攻撃方法に対応する防御の技術も含まれる。

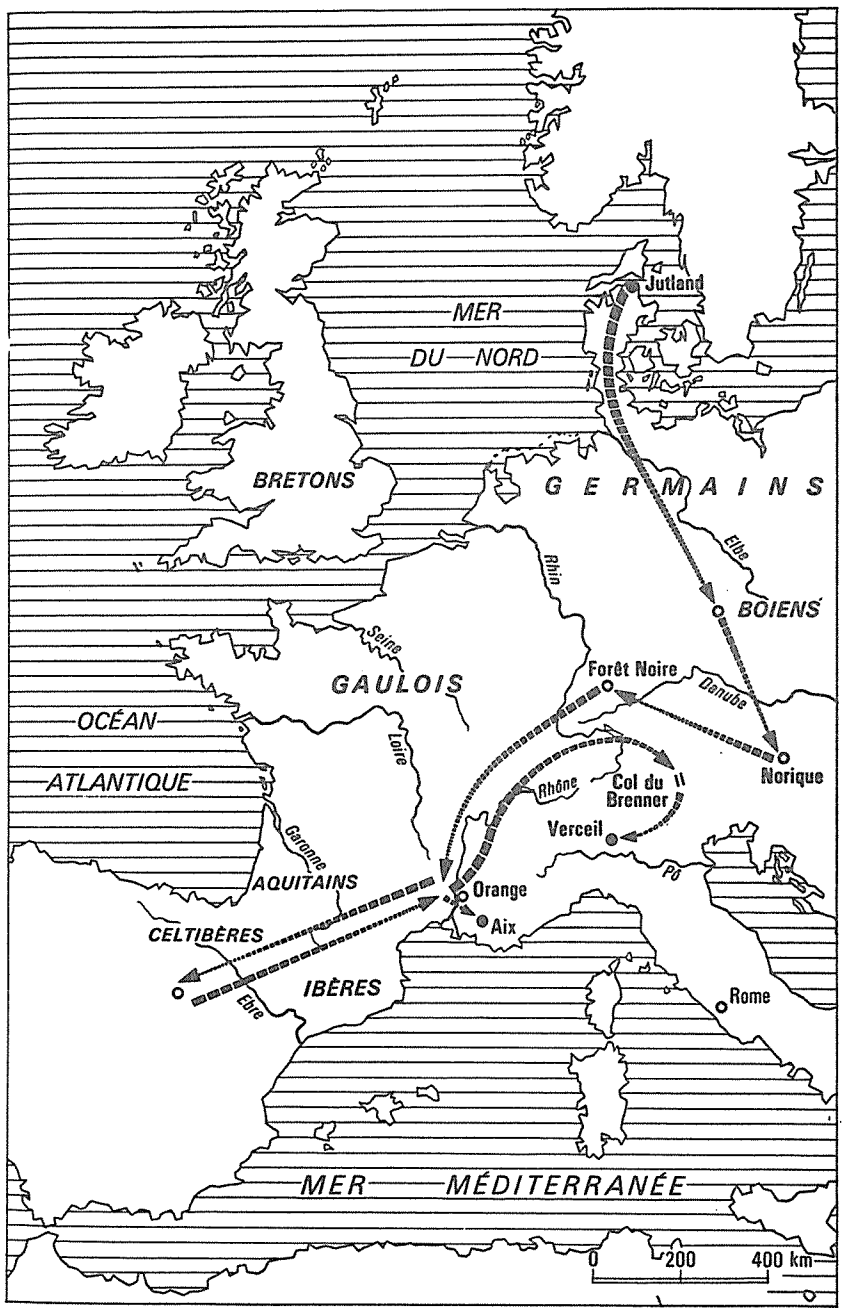
２．13　民族移動の第一の原因のひとつは，干ばつ，津波，嵐などの天然災害であり，これによって生存に不可欠な食料が枯渇することになる。もっとゆっくりとしたリズムでは，動植物の生態系の変化を司る，寒冷化や温暖化のプロセスを視野におさめておかねばならない。例えば，トナカイは長い間中部ヨーロッパの経済の柱の一つであったに違いないが，その群れが氷河期後の温暖化によって北に移動してしまった。したがって，【中部ヨーロッパにいた】人々はトナカイの後を追い，その入れ代わりに，余裕ができたその土地に，もともと南に住んでいた人々が北上して来た。

２．14　最も良く文証される民族移動の一つはキンブリ族とチュートン（テウトニ）族[8]の移動

である。彼らがもともと住んでいたのはユトランド（ユーラン）である。この半島はヨーロッパ平原からノルウェーに向かって北に突き出た部分であって，西側の北海と東側のカテガット海峡，すなわち穏やかなバルト海へ続く海路とを分断している。北海は厳しく，しばしば荒れ狂い，南東方向にその海に接している低地地方は常に脅威にさらされていた。紀元前２世紀の終わり頃，この海が荒れ狂ってユトランド北部が襲われ，潮が引いたときには今日のリム湾（Limfjord）[9]にあたる水路ができて，半島北部が切り離されてしまった。キンブリ族はオールフス北方の，今日ヒマラン（Himmerland）と呼ばれているところにいた（*kimbr-は規則的にhimmer-となる）[10]。チュートン族は明らかにもっと広く分布していたが，津波に被害を受けたのは西寄りに定住していた人々であった。リム湾[9]の北にティーステズ(Thisted)という町があるが，その Thi- という部分は恐らく Teuton の名残であって[11]，彼らが古代にこの地にいたことの傍証となっている。自分達の土地が荒廃してしまったからには，彼らの取るべき道は，【この地に留まって】食料枯渇で餓死するか，新たな土地を求めて旅立つかの二つに一つであった。彼らは南東を目指した。ボヘミアの辺境地帯に着いたところで，ケルトの部族であるボイイ族（Boïens[12]）と衝突し，そして追い払われた。彼らは進路を南に変え，ウィーン南西の今日のシュタイアーマルクとケルンテンに相当する，古代人がノリクムと呼んだ地域を通り抜けた。その途中でローマ軍（légion）と出会い，紀元前113年それを撃破した。しかし彼らは南進をやめ，進路を西へ取った。シュヴァルツヴァルト付近でケルトの部族であり，その直後に今日のスイスに当たる地域に移動することになるヘルウェティア族[13]に出会う。ヘルウェティア族の一部であるアンブロネス族（Ambrons）が移民団に加わり，ガリアを通り抜け，後のプロヴァンスに達し，そこでローマ軍に遭遇して，紀元前109年オランジュでこれを打ち破った。そして彼らはヒスパニアへと向かい，そこで土着族と衝突した。彼らはそこに固執することなく，ガリアに引き返して，そこで二手に分かれた。チュートン族はプロヴァンスに留まり，片やキンブリ族は古典的な侵入路であるブレンナー峠からイタリアに至るべく東に向かった。二度にわたって煮え湯を飲まされたローマ軍は体勢を整え，侵入者を迎え撃つべく，マリウス将軍を派遣した。彼は紀元前102年，エクサン・プロヴァンス東方の，サント・ヴィクトワール山の麓でチュートン族と相見え，そしてそれを粉砕した。勝利者側の記録に従えば，殺戮が行われ，チュートン族の女たちは殺される前に自ら自分の子供に手を懸けたらしい。翌年，マリウスはキンブリ族探索に出かけ，今日のピエモンテの中のヴェルチェッリ近郊でこれを撲滅した。大規模な自然災害がもたらす結果を良く例示するこの劇的なエピソードはこうして終幕を迎えた。明らかに敵よりも資力に劣るこのゲルマン人が，結局は戦の達人の前に屈することになるにせよ，それ以前に二度にわたってローマ軍を打ち破ることができたのは，果たして火事場の馬鹿力（énergie du désespoir）によってなのであろうか？

２．15　西の世界を「印欧人」が制覇する過程には，遠いとは言え起源を同じくする大小部族・民族間の，これと同じような争いが多々あったに違いない。付け加えれば，ロシア人とアフガン人とは言語的に親近ではあるが，今日【∵当時】彼らが繰り広げている紛争は，先のアメリカ人

とベトナム人との【言語的親近性のない民族間の】戦争と大して変わるわけではない。



原図１　キンブリ族とチュートン族の移動

2．16　部族や民族の大挙しての移動の対極に，ノルマン人の場合においてすでに触れたような移動がある。すなわち，軍事技術があまり洗練されていない民族の居住地に，領地を獲得する堅い決意に燃えた若い戦士の，好機を見計らった出撃である。印欧語の古代社会に想定されているような家父長制の枠組みの中では[3]，長兄以外のすべての兄弟は，一氏の長である長兄の権威から逃れようとするのなら，脱走して，生きるために狩猟者としての自分の才能にかけるしかなかった。このような若い征服者の旅立ちは，古代イタリアでは，宗教的な聖別（consécration）を受けた。ラテン語で vēr sacrum[14] と呼ばれた時期，すなわち，sacrum をどう訳したものかわからないが，何れにせよその春には，道中で出会ったものは何でも神々のいけにえにすることが許され，あるいはそれがむしろ奨励さえされていた。このような場合に神々というのは単なる口実であることが了解されていた。いけにえにされた動物は人の腹を満たし，男が殺されれば女が残り，運命の道具（les instruments du destin）はその女の恩恵に預かることができた。こうして新たな氏が誕生し，その長兄以外の子供はまた同様の行いをした。そのようにして次第次第にある地方が征服され，ノルマンディーの場合と逆に，最終的に征服者の言語が優位に立つ。彼らが以前に入植した種族の中から「合法的な」配偶者を見つけようとするならば特にその傾向が顕著となる。サビーニ族の誘拐（rapt des Sabines）[15] について思い起こして戴きたい。このような【略奪婚の】風習は，まだエトルリア（エトルスキ）族のような強力な民族に支配されていなかったイタリアの印欧語族の内部で，重要な役割を果たしたようである。第一の波によってエトルリアの南側にラテン人が定住した。第二の波は山中を通って以前に定住した征服者を避け，ウンブリアを，さらにはサビーニ族の地域（la Sabine）を占拠し，サムニウム族とともに【ナポリを中心とする】カンパニア地方及び長靴【＝イタリア半島】の南部に押し寄せた。

2．17　これらすべてが示唆するのは，インドからアイルランド及びアイスランドに至る地帯の印欧語化はかなり段階的に行われたに違いなく，初期の征服者の波は先住民の中に埋没してしまったか，あるいはその逆に，新たな到来者に同化しやすい性質を併せ持つ，強大な核を成した，ということである。ケルト・イベリア族と呼ばれるヒスパニアのケルト族について考えてみよう。彼らは途中のピレネー山脈とアクィタニアにバスク人がいるため，ガリアと大ブリテン島にいる同族と分断されていた。彼らは相当手強く，ローマに対し執拗に抵抗していた。彼らを制圧するために，紀元前133年のヌマンティアの占領と虐殺とが必要となったのである。

2．18　印欧語が優勢となった場所では，当然ながら住民の混血が進むことであろうし，征服者自身もそれ以前に行われた様々な混血に端を発している場合が非常に多い。最初の世代からすぐに様々な住民の統一が行われるものかどうかははっきりしない。数世紀の間，その場所では主君あるいは世襲貴族と，奴隷，農奴あるいは平民とが区別される。しかし，多かれ少なかれある程度の期間を経た後には，その対立は鎮静化するもので，ついには消え去ってしまうか，あるいは蔑視される少数派のみが残るようになる。後者の場合に，彼らに対する差別は残るかもしれないが，【公民権上】彼らが他の住民と区別されることはなくなる。これはベアルヌ地方やバスク地

方の賤民，あるいは日本の餌取（etas）【及び非人】に見られることである。より規模の大きい例としては，社会階層の最低辺に不可触貧民（アンタッチャブル）が置かれるインドのカーストが思い起こされる。

２．19　征服された先住民族が完全に吸収された場合，そのことが言語に関する新しい規範の出現によって示されることがある。日常的な用法の中では，ある言語形態が別なものに置き替わっても，そのことにあまり気付かないのが常である。劣等階級の言語習慣はかなり以前から一般的用法に影響を与えているものなのだが，以前にはくだけた，あるいは俗っぽいことばの特徴であった諸現象が，新たに，文学や厳かな場合を含めて，生活のあらゆる場面で用いられる言語形態として承認されるに至る。ヒスパニアでは，ムーア人を追放したのち，アメリカを征服したことによって16世紀の間に国家の統一が確固となったが，音韻的規範がゆれ始めたのはこの時期である。1500年頃のネブリハ（Nebrija）の文法[16]にまだ残っていた古い規範は，新たな規範に取って代わられて行くことになる。それ以前の何世紀にもわたって，ヒスパニアのロマンス語をバスク語流に不完全に真似することが行われてきたが，この新たな規範とはこれによって生じた混乱と発音の変化を取り入れたものである[4]。16世紀のはじめには，例えば viejo「古い」を上品に言う場合には，子音を今のフランス語と同じように【＝v は [b] でなくて [v]，j は [χ] でなくて[ʒ]と】発音するのがよいとされていた。【ところが】100年後には外国人に対し今日と同じ発音が勧められている。すなわち，【v を】語頭で [b]【，母音間では [β]】と，jota【＝j】をパリっ子には無声の r と聞こえる「喉の」音【＝[χ]】とする発音である。

２．20　現代アイルランド語の書記法は八世紀の注解（gloses）にまで遡る中世のテキストの書記法をかなり忠実に再現している[17]。この注解が表記しているのは当時アイルランドの修道士が用いていた言語，すなわち二音節のうちの一つを失った西ケルト語の非常に古い形である。大ブリテン島にある，その二世紀前にオガム（オアム）文字で書かれた碑文に，当時の言語が残っているが，その言語の各々の音節は印欧語の他の語派との比較から得られるものと一致し，また，今まで残っている，それよりずっと以前のいくつかのガリア語で書かれた碑文に見られるものとも一致する。その言語がそこまで変わったのはその二百年の間にではない。実は，オガム文字による碑文は，ずっと以前より日常的な用法とはすでにかけ離れた規範に従って作成されていたのである。先住民であり，伝説によれば「海の底」（sous-la-mer）からやって来たことになっているフォモール族（Fomores）の言語によって，印欧語族である征服者の言語は変容を受け，日常的な言語はすでにこの変容を反映していたに違いないのである。

原　註

［1］この表現は６世紀にゴート族の司教でかつ歴史家であった Jordanes の用いたものである。この民族の歴史についての我々の知識の基礎はこの人物に負っている。

[2] André Martinet, *Economie des changements phonétiques*, Berne 1955 の特に第Ⅻ章《Le dévoisement des sifflantes en espagnol》を参照。
[3] 以下，Ⅺ章（原著 p.232）参照。
[4] André Martinet, *Economie*...の同所を参照のこと。

訳　註

（1）イスラム教の祖ムハンマド（マホメット）Muhammadがメッカを脱出してメディナに逃れた日。西暦622年7月15日ないし16日。
（2）顕著な例としては，b も v も母音にはさまれたとき [β]，語頭などで母音にはさまれないとき [b] と読まれて両者の区別がなくなったことや，j が [χ] と発音されるようになったこと，[f] が [h] を経て無音となったこと，弾音の r [ɾ] と顫動音の rr [r] が区別されることなど。2.19参照。これらの特徴は少なくともヨーロッパにおいては恐らくバスク語とスペイン語のみに共通して見られ，先住族の言語である前者から後者への影響は疑うべくもない。
（3）両音節とも正常階梯で記せば IE *kʷetwer-.
（4）<IE *kor-o- "war, war-band, host, army"（Watkins 32）. 例えばOE here「軍」等を参照されたい。問題のケルト語の形は例えばE harry「侵略(する)」と同様に *kor-y-o- に起因する。
（5）SCr. Vlăhを参照。h は [x] と発音され，原著者はこれをドイツ語に倣ってか ch で写している。
（6）453年頃にアッティラが没した後，フン族は急速に弱体化したため，原著者の記す6世紀は除外されるべきであろう。この点は下郡健志氏にご指摘戴いた。
（7）紀元前3世紀から紀元後5世紀にわたって漢族を脅かした北方の遊牧民である匈奴と同一視されることがあるが，その真偽については不明。
（8）ラテン名 Teutonī, Teutones は，IE *teu(ə)-"to swell"（Watkins71）に起因する *teutā- "tribe" に接尾辞を付して作られている。後者はゲルマン語においてグリムの法則（5.61）とヴェルナーの法則（5.66）の適応を受けGmc. *þeudāとなり，これに接尾辞を付与して作られた形容詞 *þeudiskaz "of the people" から G Deutsch や E Dutch が生じている。4.12参照。その原義は「民衆的」の類であったと思われるが，Goth. þiuda を借用して接尾辞 -j- を加えて作られたと思われるR чужой や Cz. cizí etc.（< *tjudj-）は「異国の，縁遠い」等という全く逆の語義を獲得している点が興味深い。
（9）原著初版にはイセ湾（Isefjord）と書かれているが，地理的に明かな誤りのため訂正した。二度出てくるうちの最初のものだけが原著第2版でリム湾に訂正されている。リム湾は本来的な湾というよりもユトランド半島先端部を大陸から切り放している水路であって本文の内容と一致するが，イセ湾はユトランド半島ではなくコペンハーゲンの位置するシェルラン島北部にある。
(10) k>h はグリムの法則（5.61）による。
(11) sted の部分は E stead, G Stadt に相当する。Gmc. *staðiz "place" は IE *stə-ti- に由来し，その語根（強階梯）は *stā- "stand" である。
(12) ラテン名 boii. 今日のチェコ共和国に属すボヘミアの名称は彼らに由来する。
(13) スイスのラテン名 Helvetia は彼らに由来する。
(14) 文字通りには「聖なる春」であり，飢饉や災害のあった後の春に設定された。
(15) 伝説のローマ入植団（第Ⅰ章訳註11参照）に女性が含まれていなかった，あるいは非常に不足していたため，子孫を生む女を獲得すべく，彼らラテン人と民族・言語的に近く，また近隣に居住していたサビーニ族から狡猾な手段で多くの若い女性を略奪した事件を指すものと思われる。結果的にラテン族とサビーニ族の間に血縁関係が生まれ，合同してエトルリア族との抗争が行われることになった。モンタネッリ（1976: 20ff.），井上（1985: 254ff.）等を参照。
(16) 大阪外国語大学学術研究双書に本学教授中岡省次氏による同書の翻訳『カスティリア語文法』がある。
(17) 第Ⅰ章訳註7にも記したように，1948年に綴の改訂が行われており，現行の書記法はこれとは異なっている。

第Ⅲ章
印欧語拡大の一般条件

３．１　先史時代及び歴史時代の初期において印欧語の様々な語派がどのような関係にあったのかを見極めようとする際，何よりも肝に命じておかねばならないのは，当時のヨーロッパの住民構成は現代において我々の知っているそれとは全く異なっていたということである。今日では，個人個人が何らかの国家に帰属しているし，正確な国境がある。国境の内部では，言語や民族（ethnies）の分布は多種多様なのだが，国境が存在することによって，我々は組織がある意味で単純であるという印象を受ける。

採集と農業

３．２　紀元前第二千年紀のヨーロッパの状況は今日とは全く異なっていたはずである。そこかしこに空白地帯（solitions de continuité）があった。すなわちある特定の民族はかなり広い地帯に広がっていて，その中に彼らの住んでいない場所，あるいは他の民族のいる場所が点在していたのである。当時はまだ多くが遊牧民であったため，【同じ民族の間の】接触がある地点で希薄になることもあったし，また後に接触が再開されることもあった。当時の人口密度は非常に低い。その密度は，大地の耕作が開始される前の，新石器時代以前のそれと同程度である。「新石器」というのは非常にあいまいな用語である。文字通りにはこの語は「新たな石器」，すなわち「磨製石器」を指す。しかし，この語の実際の用法では，石で作った道具の性質を示す場合よりも，大地の耕作を示す場合の方がずっと多く，金属が出現しても人類の進化のこの段階は終わりにならない。新石器時代の前に，狩猟あるいは採集（cueillette）によって生活を営んでいた社会を想定すべきである。採集とは大地の恵みを食することではあるが，食用とされるのがもっぱら自然の産物，すなわちフランス語では古く《racines》【根菜】と呼んでいたものである場合を指す。南アフリカでは今でもブッシュマンが採集によって暮らしている。彼らの食物の大部分は植物より得られ，集めたり掘り起こしたりして，葉や茎，あるいは根を食べる。これと並行して彼らは狩も行い，栄養を補うためその獲物を食用にしている。「新石器」という用語が用いられる場合，このように形容される人々はもはやその段階にいないのが普通である。彼らは採集と狩猟を完全にやめたわけではない――【特に】狩猟をやめることは絶対にない――が，食料の重要な部分，さらには大部分は農耕によって得られるようになってゆく。

３．３　農耕が開始されれば，それに伴って人口密度はだいぶ高くなる。採集と狩猟によって一族を養うためには，広大な土地が必要である。人間の食用に適した植物は自然の中ではかなり散り散りに生えるものだからである。例えば森の中できのこ狩りをする場合を考えてみればおわかりだろう。その逆に，あらかじめ耕しておいた場所に小麦を蒔いたなら，穂が実る茎の密集度は格段に向上する。人の生活の糧を成す収穫そのものは，動物であれ植物であれ，自然の恵みに依

存している。そしてこれが人間の発達を規定するのである。

３．４　紀元前第三千年紀から第四千年紀，すなわち新石器風生活様式が広がって行く時代に，この生活様式はヨーロッパのドナウ川流域地帯に定着した。他の地方でもこの生活様式は勢力を拡大して行くが，そのペースは緩慢であり，人口密度は非常に低いままであったことだろう。もっぱら採集と狩で生活する場合，その人口密度は一平方キロメートルあたり0.5人程度とみなされよう。一方，実際フランスには現在同じ面積の中に100人程度がおり，西ヨーロッパの他の場所では人口密度はさらに高い。したがって，問題の時代において，生活空間における空白地帯と半遊牧生活がかなり一般的であったと考えねばならない。

３．５「新石器時代」が農耕をも含意するのであるから，我々はこの時代をまだ脱していないことになる。さらに，採集は今でも続いている。誰でも林で木の実を採ったことぐらいはあるだろう。あらかじめ獲物を持ち込まなければならない場合もあるにせよ，狩も同様に存続している。興味深いことに，狩は今では庶民とは無縁の，高貴な行いとなってしまったが，その一方で，農業は古くから平民（manants）の生業（なりわい）と考えられている。

３．６　農業によって定住化が行われるかのように思われるが，定住化は自動的になされるわけではない。大抵の場合，農業とは言っても家の程近くの家庭菜園（jardinage）のようなものである。他方，その「家」だって恒久的な建物であるわけでもない。テント，すなわちモンゴル人の「ユルタ（パオ）」のようなものかもしれない。一旦収穫が済めば，移動が行われる。その理由は簡単である。周知のように，以前に開墾した土地よりも，処女地の方が作物はずっとよく育つのである。今日では，肥料があればどんな土地であっても耕作を行うことができる。耕作可能な土地に求められることは，平らであることである。ランド地方は，土地が耕作に向いていなかったので，かつてはほとんど人が住んでおらず，まずはじめに松の木が植えられた。ところが今では土地は至るところで刷新され，そこでとうもろこしが大量に収穫される。化学肥料の存在によって，問題となる諸条件がこのように完全に変わってしまったのである。しかし，当初，すなわち新石器時代が始まった頃には，人々は収穫量を増やすことのできる地点に一シーズン腰を落ちつけて，翌年には移動した。他の場所，処女地での収穫がずっと増えることを知っていたからである。このことは今日，パリの周辺でも確認することができる。百年間耕作が行われていない場所の一画を耕せば，一年目には驚くほどの収穫が見込まれることであろう。

３．７　大地を耕すようになったからといって，人々は新たな土地を求めて移動を繰り返したのであるから，遊牧生活が終わったとは言えない。後に，人口が増えて，人々が協力することを始めてから，肥やしを用いれば同じ土地に留まっていられることがわかったのである。肥やしにはじめは家畜や人間の糞尿が用いられたが，だいぶ後になって，他所から持ち込んだ物や，ついには化学物質が使われるようになる。植物は種類によって違う深さの土を利用すること，すなわち，ある種の植物は浅い土層でしか，他のある種は深い土層でしかよく育たないこと等がわかってきて，三圃（ほ）式輪作が開始された。こうして，一年目には根がとても浅い小麦を，二年目にはもっ

と深いところから養分を摂取するビートを作り，三年目には，休耕と呼ばれることだが，土地を休ませる，ということができるようになった。しかし，今問題にしている時代にはこのような工夫はまだ行われていない。

３．８　同様に念頭に置いておかねばならないのは，印欧語を話す民族の拡大が行われているとき，先端技術は前線には及んでいなかったということである。これらの民族はお互いに離れてしまうこともありうる。人口密度の低い区域を通る場合，先住民の住んでいる区域や，砂漠，あるいは湿地を迂回するために，起源を同じくする民族が別れ別れになってしまうこともある。遊牧生活あるいは半遊牧生活が営まれていれば，ややもするとこれらの起源を同じくする人々が接触を失ってしまうこともありうる。

ケルト族の拡大

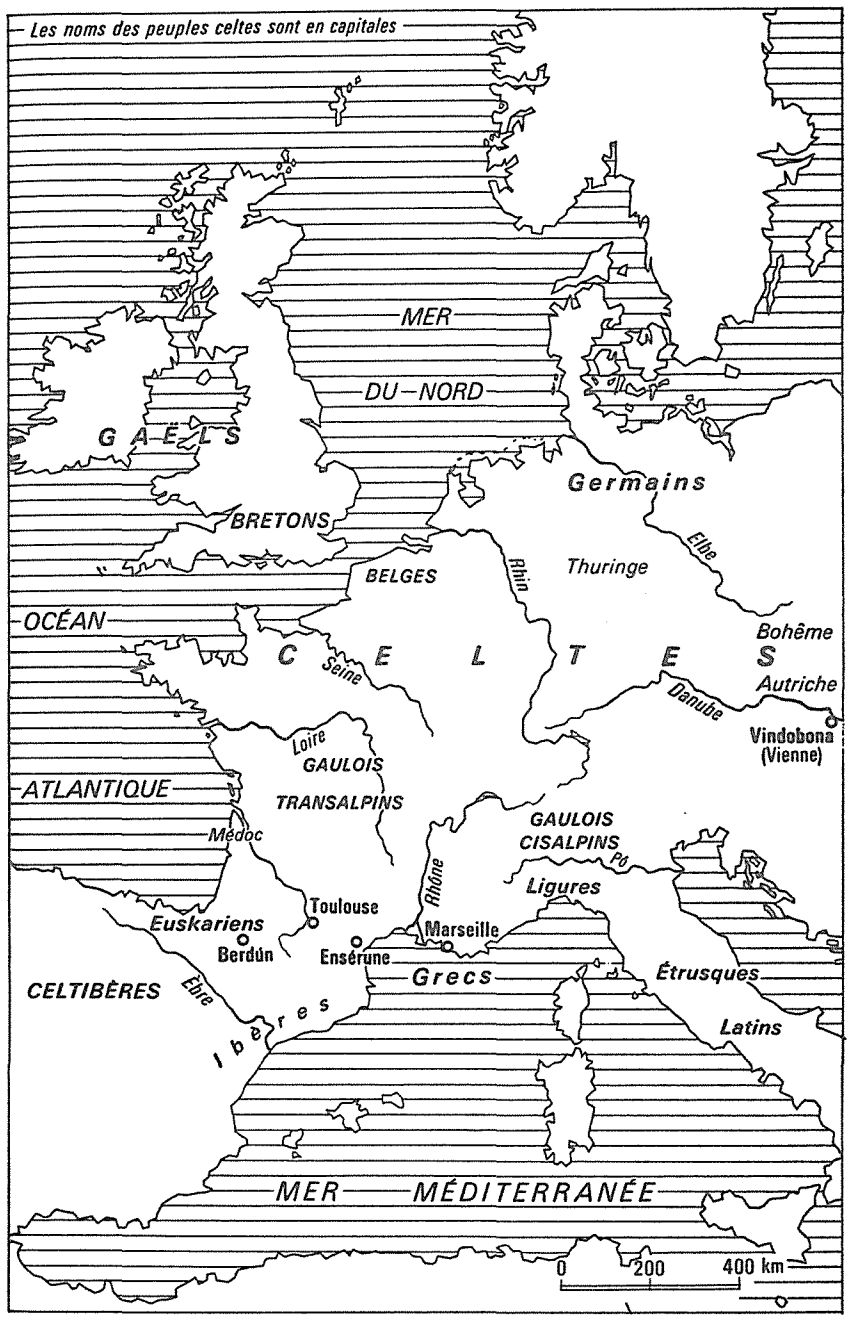
３．９　規模の大きな例として，ケルト族の拡大の場合を取り上げてみよう。確認される最初の時点では，ケルト族はドイツのチューリンゲンとその南部にいた。同様にボヘミアや今日のオーストリアに当たるところにも居住していた。その後，彼らは徐々に後にガリアと呼ばれる地域に到達したが，ローマ人が到来した時点では，ガリア全土がケルト化しているとも，さらにはケルト族の支配下にあるとも言える状態ではなかった。この地でローマ人が地中海沿岸地域を占領して Provincia rōmāna すなわちプロヴァンスを作ったとき，この地域をケルト人が占領してからせいぜい二世紀しか経っておらず，支配もそれに見合って表面的なものであった。イベリア人がラングドック平野から追い払われたのは言うまでもない。ガスコーニュでは恐らくトゥルーズを橋頭堡としてメドック，ボルドー，アルカションといった周辺部のみが手に入った。他の所にはエウスカラ語（euskarienne，バスク語と言ってもよいだろう）を話すアクィタニア（アキテーヌ）人が住んでいた。しかし，アクィタニアとピレネー山脈を越えて，より南方に，ケルト人はヒスパニアとの接触を維持する拠点を確立したと思われる。彼らの一部はここに定住した。ケルト・イベリア人というのは彼らのことである。こう呼ばれたのは必ずしも彼らがケルト人とイベリア人の混血であったからではなく，むしろ単に，恐らく，ヒスパニアに向かうローマ人が彼らと接触するまでにイベリア人の居住地域を通らねばならなかったからであろう。

３．10　今日のプロヴァンスに当たる場所には，紀元前二世紀にローマ人が到来したとき，「ケルト・リグリア人」がいたとされている。ここで問題になるのはリグリア人である。その言語はまず確実に印欧語ではなく，紀元前600年にギリシア人がマッシリア（マルセイユ）を建設したときに，彼らはここにいた。北方からケルト人がやってくるのはその二世紀後のことであり，ギリシア人の居住地が点在する沿岸地帯にケルト人が住んだ形跡はない。考古学に従えば，内陸部においてケルト人は先住民族に対し残忍な支配を強いたとされる。ラングドック平野の中では，ナルボンヌ（Narbonne）という地名がケルト人に由来する。すなわちここには Vindobona「ウィーン」（ドナウ川の「白い港」の意）にも見られるケルト語の-bona「港」が含まれている。他方

ベジエ近郊のアンセリュヌ遺跡は，ケルトのウォルカエ族が到来する以前に，イベリア人の入植が盛んであったことを物語っている。

3．11　ケルト人がヒスパニアに向かう際に通ったのは，地中海沿岸ではなく，ピレネー山脈であった。恐らく手近なソンポール峠を越えたのであろう。これを証明しているのが峠の道の南の出口にある Berdún の遺跡である。これはアクロポリス状の小高い要塞都市（オッピドゥム）であり，当然ながら Verdun【1.7参照】のことである。カスティリア語の影響で b と v が混乱している。この地名の由来は明らかである。ver- は wer- に遡り，後者はさらに *uper- に由来する。後述【5.79】のように，ここに見られる p の脱落はケルト語の最も特徴的な現象なのである。これはよく知られた印欧語の副詞であり，ラテン語の super のように語頭に s- を伴うこともあるし[1]，ドイツ語の über や英語の over のようにその s- を伴わないこともある[2]。ギリシア語の hupér はそのどちらに起因するのかよくわからない。【古典ギリシア語の基礎たる】アッティカ方言では語頭の u- は，u- に由来する場合でも su- に由来する場合でも，すべて気音を獲得して【hu- となって】しまうからである。wer- の意味は「上に」（sur[3], au-dessus）であって，supermarché【スーパーマーケット】やhypermarché【大型スーパーマーケット】のような現代フランス語の合成語に見られる super- や hyper- のそれと同じである。この要素はまた，恐らくは本当の名前ではなく肩書きであったと思われるウェルキンゲトリクス（Vercingétorix）「【原義は】戦士の最高司令官」[4] にも現れている。他方，長い u を持つ -dūn はどうやら本来「囲い」のことであったらしい。これに正確に対応するものに，ドイツ語の Zaun「垣根」，オランダ語の tuin「庭」，英語の town「町」がある[5]。このような意味の違いは別な語（印欧祖語の *ghortó-）にも認められる。それはラテン語 hortus「庭」，ギリシア語 khórtos「囲い」，英語 yard「中庭」[6]，あるいはまた派生語としては英語 garden[7]，ドイツ語 Garten[8]，フランス語 jardin[9]，恐らくゲルマン語からの借用語と思われる古代教会スラブ語 gradъ（ロシア語 gorod）「町」[10] に現れている。したがって verdun とは本来的には丘の上に築かれた囲われた場所を指したのだが，後には恐らく囲われた場所一般を表すようになったのであろう。地名学の研究によると，このような要塞都市（オッピドゥム）がガリアとヒスパニアのケルト人定住地を結ぶルート上に点在していたことはほぼ確実である。

3．12　もっと北に目を移すと，ヨーロッパ大陸内であれ，英仏海峡を越えた島嶼部であれ，ケルト人の支配がより古くから行われていたことは確実である。しかし彼らの支配は，以下に見るように，連続する波によって生まれたのであり，後にアイルランドに居を定めることになるゲール人は紀元後初期の数世紀には大ブリテン島でブルトン人の西側にいたことが確認されている。初期には先住民の言語を尊重しつつも，入植民族の動的な視点を守ることが絶対に必要であった。先住民が侵略者の言語を学び覚えて行くに連れて，侵略者は先住民の生活習慣と要求に応じることとなった。今日のケルト語はあらゆるレベルでこのような特徴を示しており，特に統語論の分野において顕著であって，例えば c'est... qui のタイプの構文[11] が盛んに用いられるが，この構



原図２　紀元前三世紀における中・西部ヨーロッパのケルト人
（ケルト諸部族名は大文字で，その他の部族は小文字ゴシックで記される）

文は古い文献には現れないものである。このような特徴はしばしば西ロマンス諸方言にも現れる。例えばc'est... que の構文はフランス語でもよく用いられるし[12]，カスティリア語には《être》に二類の区別[13]があって，アイルランド語にも同様の区別がある[14]が，これはフランス語にも全く無縁というわけではない。【フランス語の半過去】était は【ラテン語 stāre の未完了過去3人称単数】stabat に由来しており，この形が，être【<Lat. esse】の活用において，ラテン語の語根 es-【<IE *es-】と fu-【<IE *bhu-】を補充しているのである[15]。

社会階層

3．13　印欧語の拡大が，たいていの場合に，支配する立場にある貴族階級による地元住民の奴隷化という形で行われたことは明らかである。国家社会主義的企て[16]を正当化するためにドイツ人が繰り返し用いた用語を使うならば，印欧語の使用者は初期において Herrenvolk，すなわち支配民族であった。支配層とそれ以外の住人との関係は様々であった。ある場合には，例えばスパルタにおけるように，ヒエラルキー化した階層が存在していたと考えられる。そこでは狭義のスパルタ人である，ほぼ戦士に限られたスパルタ市民（スパルティアタイ）に隷属する形で，その周辺地域に，市民権を全く奪われた人々である，ペリオイコイが住んでいた。彼らは主人たちが武術の鍛錬に用いる様々な道具を作っていた。第三の階層であるヘロットは本当の意味で単なる制度的な奴隷であって，こき使うのも殺してしまうのも自由であった。ペリオイコイは十中八九アカイア人であり，彼らの祖先は印欧人の第一の波として紀元前2000年頃ギリシアに到来し，ミュケーナイ文明を築いたのであった。ヘロットは恐らくアカイア人の到来以前より当地に居住していた民族である。スパルタ市民は第二派の印欧人として紀元前1200年頃ギリシアにやって来たドーリア人であるが，彼らがアカイア人と同じ種族の出身であったという保証はない。ギリシア語のドーリス方言は，その発達の過程でいわゆる上層言語たる支配層【＝ドーリア人】の言語から多くの影響を受けたアカイア語に他ならなかったと思われる。支配層の言語自体は，庶民の言語【＝アカイア語】によってついには排除されることになったのである。

3．14　当然ながら，この種のあらゆる状況において，侵略者と原住民あるいは混血者との人口比率が考慮され得る。しかしながらこれはかなり難しい問題である。事情がかなりよくがわかっているスパルタの場合には，支配階級は全体の十分の一以下と算定され得る。しかしこれは無論その時代によって様々である。かつて金髪の出現頻度をもとにした見積が行われたことがあった。よく知られているように，ローマ人はガリア人のことを金髪であると記している。一方，現代のフランス人に目を向けると，彼らに民族的に新たな血が加えられたのは，同じく大部分金髪だったに違いないゲルマン人の到来によってであるのに，どういう訳かフランス人の大部分が褐色の髪になってしまっている。金髪というのは，バルト海近隣地域から生じた，毛髪構造の一種の病気であるとする解釈が行われたことがある。これは大胆な仮説であるが，今日またもや脚光を浴びつつあると言ってよいだろう。実際，スカンディナヴィアのバルト海沿岸の浜辺で一夏を過ご

してみれば，浜辺に金髪を目にする機会がたくさんあることだろう。他方，青い目はこれとは全く別問題である。よく知られているように，碧眼の分布は金髪よりもずっと広い。例えばブリテン島の諸民族は髪は褐色でも目は青いのである。金髪とバルト海の影響に話しを戻せば，確かに獲得形質が遺伝するとは証明されていない。しかし，突然変異が維持され得ると仮定することによって，生息環境が個人の肉体的タイプに影響を与えることが説明され得るのも明白である。結局のところ，世界の中で髪が金色なのは，ある時代にヨーロッパ北部に居住していたと思われる諸民族だということになる。フランスでは北部及び東部に金髪が多いが，この傾向はロシアを含めてヨーロッパ全域について一般的である。歴史において，印欧語を話す征服者が金髪である旨の記述がしばしば見られるが，だからといって彼らが必ずしもバルト海沿岸地帯の出身であるとは言えない。生息環境が問題なら，多分北方であることは確かにしても，【バルト海周辺などよりも】はるかに広く分布していてもよさそうなものである。

３．15　せいぜいのところ，一連の方々によって散発的で印象主義的な評価が為されているに過ぎないような，消滅した民族が話題となるのなら，金髪の起源がどうであれ，そんなことを考慮の対象に加えることなどできない。古代の印欧語を話す諸民族が一般に金髪に高い評価を与えたことを認識していればよい。これは勇者がしばしば持っていたとされる肉体的特徴である。[1]

原　註

［1］例えば，Deucalion & Pyrrha, *Etudes indo-européenes*, Lyon, Université Jean-Moulin, pp. 1-12 所収の Jean HAUDRY のこの点についての見解を参照せよ。

訳　註

（1）movable s と呼ばれる要素で，原義を変えない。その機能についてはよくわかっていない。5.82参照。
（2）IE*upér-i-よりグリムの法則と有声化を経てGmc.*uφéri-＞*úβeri-が導かれる。有声化が行われない場合はヴェルナーの法則（5.66）によって説明される。β はドイツ語では b，英語では v で現れている。
（3）この語自体も Lat. super に起因する。すなわち super の p が母音間で有声化（b）し，さらに摩擦音化（β）を経てついに脱落し，F sur が導かれる。有声化まで同じ経過をたどった Sp. sobre を参照されたい。母音等の有声音の間で閉鎖音が有声化し，さらに摩擦音化する現象は言語の別を問わずかなり広く見られる。本書5.84や神山（1995: 145f., 168f.）を参照されたい。
（4）紀元前52年カエサルを破ったケルトの将軍の名として知られる。
（5）これらが直接に印欧祖語に遡るとすると IE *dūn-o- が想定されねばならないが，これを採用する語源辞典はなさそうである。Watkins (15) によればGmc.*tūnazはCelt. *dūn-o-（e.g. OIr. dūn＜IE *dhūno-「囲まれた場所」）の借用とされる。この借用はグリムの法則が生じる前でなければならない。この*dhūno-の語根分析は難問で，Pokorny (261ff.) は*dheu-[4]「飛び散る，渦を巻く，風が吹く等」を立て，Skr. dhūmás「煙」，Gk. thūmós「息」，Lat. fūmus「煙」，OCS dymъ「煙」等と共通とみなしているが，意味的発達の点で説得力に乏しい。
（6）例えば Watkins (22) は祖語に*ghor-dho-s を立て，そこからGmc.*gardaz を導く案も並記してい

るが，原著者が示唆するように，アクセントが第二音節にあるIE*ghor-tó-s から出発しても，グリムの法則と有声化を順次受けて*garθáz，次いで*garðaz＝*gardaz が得られる。英語の g＞y は周知の硬口蓋化である。

（7）これは直接には ONF gardin からの借用語だが，その後者もGmc. *gardaz を弱変化のn-語幹名詞とした*gardon からの借用語である。結果的に英語では由緒正しい yard と借用語の garden が二重語を成すことになった。

（8）上の註に記したようにn-語幹化した*gardon に由来するOHG garto を直接の祖先とする。第二次子音推移によって d＞t が生じている。

（9）Gmc. *gardon が借用され，*gardin を経てF jardin に至る。語頭の g が j[dʒ]（さらに後に [ʒ]）に転じたのはいわゆる硬口蓋化によっている。It. giardino や Sp.jardin はさらにフランス語からの借用語である。フランス語では a の前でも軟口蓋音が硬口蓋化するため，a が前舌の [a] あるいは [æ] だったとも想像される。神山（1995: 152）参照。

(10) スラブ語は Gmc. *gardaz を*garda- の形で受け入れたものの，方言によって異なる方法でその第一音節の閉音節を排除したと考えられている。古代教会スラブ語を含む南スラブ語では第一音節の母音と流音とをメタテーゼし，かつ母音を延長して*grāda-＞*grado-を得た。一方ロシア語を含む東スラブ語では流音の前の母音を流音の後にも挿入し，*garada-＞gorodo-として開音節化を達成した。詳しくは Mareš（神山訳; 1996: 122）等を参照。

(11) アイルランド語では is ～ a...である。

(12) フランス語の c'est ... que... の起源は，英語のit is... that...のいわゆる強調構文のそれと同様によくわからない。あるいはケルト語からの借用とも考えられるが，原著者の記すようにケルト語の古い文献に現れないとすると，ブリテン島あるいは大陸北西部の先住民の言語に端を発し，ケルト語を経由して英仏語にもたらされたのかもしれない。

(13) Sp. ser と estar. それぞれLat. esse「ある」と stāre「立つ」に起因する。以下の訳註15も参照。

(14) 連辞 is と実動詞（substantive verb）tá である。土居（1988a: 119）. Sp.ser と estar と同様にそれぞれIE *es-「～である」と *stā-「立つ」に遡る。

(15) Lat. esse は強語根 es- に不定法のマーカー -se を加えて作られているが，一方他の多くの動詞では s が母音にはさまれると r となるロタシズムと呼ばれる現象のため，不定法はたいていの場合 -re に終わっている。このため俗ラテン語の時代には esse は不定法のしるしを欠いているかのように感じられ，過剰矯正（hypercorrection）によってさらに -re を加えて essere となった。神山（1995: 216, 264）参照。西ロマンス語は一般にこの最後の母音を失うが，スペイン語は語頭の母音のない形から ser を得た（これはフランス語の未来形 je serai, 条件法 je serais 等にも現れている）。一方フランス語は次末音節の e を失って *essr から sr に挿入音の t を獲得（神山1995: 216）して *estr となり，さらに s が脱落して今日の／ɛtr／すなわち être が得られる。stāre に起因する Sp. estar や F était が連辞として用いられるようになった背景には，しばしば指摘されるその意味的な発達に加えて，形態的類似性があることは明らかである：e.g. estar:*estr; était: êt(re) etc. 島岡（1980: 88-97）にこの問題の概略が日本語で記されているので参照されたい。

(16) すなわち，国家社会主義ドイツ労働党いわゆるナチ（Nazi）党の諸政策。

参考文献（訳註）

Bammesberger, Alfred (hrsg.) 1988. *Die Laryngaltheorie*. Heidelberg: Winter.

Bloch, Oscar & Wartburg, Walther de 1994[10]. *Dictionnaire étymologique de la langue française*. Presses universitaires de France.

Buck, Carl Darling 1949. *A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages*. The University of Chicago Press.

Burrow, Thomas 1973. *The Sanskrit Language*. New and revised edition. London: Faber &

Faber.
Гамкрелидзе, Тамаз Валерианович & Иванов, Вячеслав Всеволодович 1984. *Индоевропейский язык и индоевропейцы.* I-II. Тбилиси.
Черных, Павел Яковлевич 1993. *Историко-этимологический словарь современного русского языка.* I-II. Москва.
土居俊雄 1988a.「アイルランド語」『言語学大辞典 世界言語編』第１巻.
_____. 1988b.「ケルト・イベリア語」『言語学大辞典 世界言語編』第１巻.
蛭沼寿雄 1988.「ケルト語派」.『言語学大辞典 世界言語編』第１巻.
井上幸治（編）1985.『ヨーロッパ文明の原型』（民族の世界史８）. 山川出版社.
神山孝夫 1992.「スラブ語の『娘』をめぐって」『ロシア・ソビエト研究』第16号. 大阪外国語大学.
_____. 1995.『日欧比較音声学入門』鳳書房.
_____. 1996. Book review. И. Ямагути: Руйкэйгаку дзёсэцу (Введение в типологию). *Japanese Slavic and East European Studies.* 17. pp.107-111.
風間喜代三 1978.『言語学の誕生』岩波新書.
_____. 1984.『印欧語親族名称の研究』岩波書店.
_____. 1987.『ことばの生活誌』平凡社選書113.
_____. 1990.『ことばの身体誌』平凡社選書133.
_____. 1993.『印欧語の故郷を探る』岩波新書.
高津春繁 1954.『印欧語比較文法』岩波全書.
_____. 1960.『ギリシア語文法』岩波書店.
Kruta, Vencelas 1990[5]. *Les Celtes.* Paris: Presses Universitaires de France. 鶴岡真弓訳『ケルト人』白水社. 1991.
Lewis, Henry & Pedersen, Holger 1937. *A Concise Comparative Celtic Grammar.* Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.
Lindeman, Frederik Otto 1982. *The Triple Representation of Schwa in Greek and Some Related Problems of Indo-European Phonology.* Oslo-Bergen-Tromsø: Universitetsforlaget.
_____. 1987. *Introduction to the "Laryngeal Theory".* Norwegian University Press.
Mareš, František Václav 1991[2]. Vom Urslavischen zum Kirchenslavischen. Peter Rehder (ed.) *Einführung in die slavischen Sprachen.* Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft. 神山孝夫訳「スラブ祖語から教会スラブ語へ」『大阪外国語大学論集』第15号（1996）. pp.109-140.
Mayrhofer, Manfred 1978[3]. *Sanskrit-Grammatik mit sprachvergleichenden Erläuterungen.* Berlin－New York: Walter de Gruyter.
モンタネッリ, I. 1976.『ローマの歴史』藤沢道郎訳. 中央公論社.
森安達也（編）1987.『スラヴ民族と東欧ロシア』（民族の世界史10）. 山川出版社.
Onions, C. T. 1966. *The Oxford Dictionary of English Etymology.* Oxford: Clarendon Press.
Palmer, Leonard R. 1954. *The Latin Language.* London: Faber & Faber.
Pfeifer, Wolfgang 1993[2]. *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen.* I-II. Berlin: Akademie Verlag.
Pokorny, Julius 1994[3]. *Indogermanisches etymologisches Wörterbuch.* Tübingen und Basel: Francke Verlag.
Rialtas na hÉireann 1986. *Foclóir póca.* Baile Átha Cliath (Dublin): AN GÚM.
Schmitt, Rüdiger 1981. *Grammatik des Klassisch-Armenischen mit sprachvergleichenden Erläuterungen.* Innsbruck: Inst. für Sprachwiss. d. Univ. (Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft; Bd. 32)
Schrader, Otto 1935. *Die Indogermanen.* Neubearbeitet von Hans Krahe. Heidelberg: Quelle und Meyer. 風間喜代三訳『インド・ヨーロッパ語族』クロノス. 1977.
Шанский, Николай Максимович (ред.) 1963-. *Этимологический словарь русского языка.* Издательство

Московского университета.
島岡茂 1980.『フランス文法の背景』大学書林.
Stokes, Whitley & Bezzenberger, Adalbert 1979[5]. *Wortschatz der keltischen Spracheinheit*. Unveränderter Nachdruck der 4. Auflage von 1894. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.
Szemerényi, Oswald 1990[4]. *Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
Watkins, Calvert (ed.) 1985. *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*. Boston: Houghton Mifflin Company.
Winter, W. (ed.) 1965. *Evidence for Laryngeals*. The Hague: Mouton.
山口厳 1995.『類型学序説』京都大学学術出版会.

(1997. 5. 9 受理)